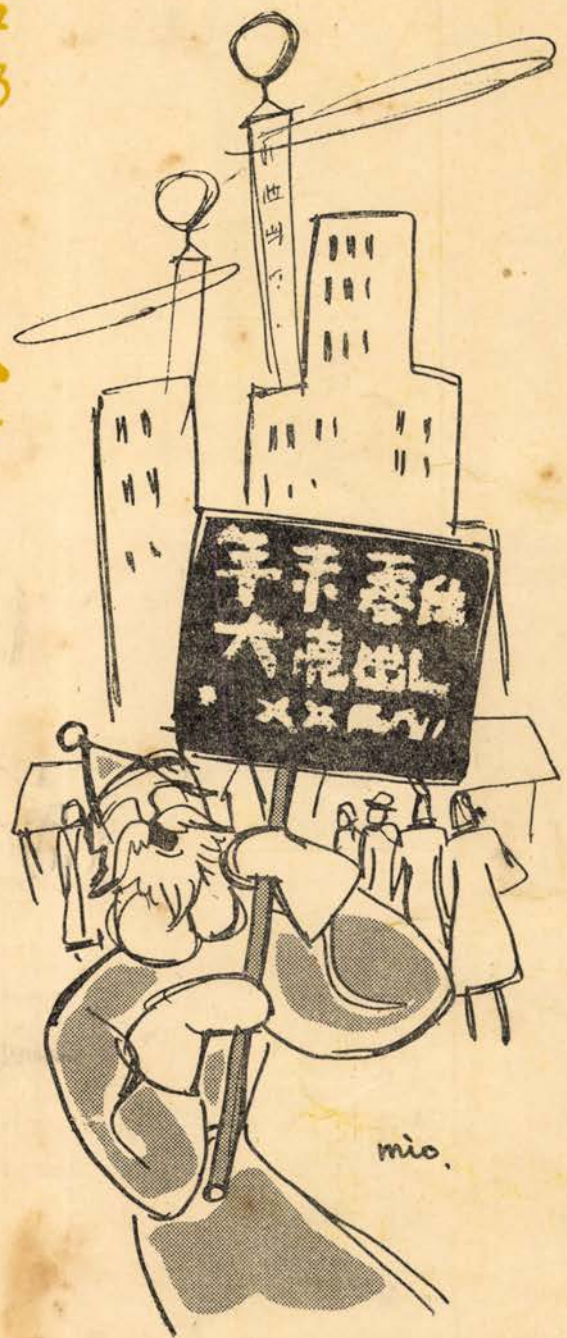


昭和廿八年七月一日第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行) 創刊大正十三年・通卷三百十九号

Pensoj flugas trans la land-linon
The Senryu Zasshi

No.319

麻生路郎☆主宰



川柳の雅証

十二月號

十二月号目次

(昭和二十八年)

題字……………麻生 路郎	飛燕往来……………(二)
表紙……………米田三男之介	大阪市民川柳大会受賞者……………(二)
川柳に詠まれた歳末風景……………豆秋・水客 花村・梨里 (一)	★ 不朽洞句……………麻生路郎 (三)
川柳も亦然り……………麻生 路郎 (三)	川柳 塔……………麻生路郎選 (四)
浅間の宿……………井上 湧三 (六)	同舟近詠……………諸 家 (三)
新川柳鑑賞……………麻生 路郎 (三)	近作柳欄……………麻生路郎選 (六)
句集「旅人」刊行に寄せて……………八木摩太郎 (九)	一路集 「外交」……………橋本 緑雨選 (三)
人間横丁(禮)……………東野 大八 (三)	「故郷」……………古川麗花麗選 (三)
川柳の歴史落穂……………福田山雨楼編 (三)	各地柳壇……………(五)
平清盛(三)……………富士野鞍馬 (四)	不朽洞会から……………(七)
一枚のはな紙……………麻生 路郎 (五)	柳界展望……………(二)
	編輯局にて……………(三)




大丸の商品券

八都の大丸を結び

京・神・神三店と高知・鹿野
下関・別子・博多各大丸共通

300円より1万円まで7種
各店とも1階商品券売場



大丸

大阪心齋橋

大阪名菓

もなかは氏かゝり
源氏こそ最や

百貨店著名菓子店にあります
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九

民かまど本舗

電話 三三〇九

不朽洞句帖

麻生路郎



足らぬなら足らぬでもよし十二月
女の訪間を特によるこぶ父でした
灰色だつたり白色だつたりする銀座
べんちやらのつもり 放送聞きました
老妓とはさびしき名なり秋の夜の

川柳も亦然り

カレンダーが残りすくなく
なつた。当り前のことではあ
るが。

ある寺の魚板に

無常迅速

時不待人

と書いてあるのを思い出し
た。

菜根譚には

天地有万古

此身再不得

とある。私は三十年前に、
「一句を遣せ」と書いたが、
もうその一句が出来たであろ
うか。

猫が私の横で、お化粧をし
ている。何んの苦もなさそう
である。これが十二月の風景
だとは思えない。

けなげなり

猫、猫なりの

みだしなみ

と云う一瓢の句が、あたまに
浮んだ。

人間も人間なりの苦惱をつ
むことによつてのみ一人前の
人間になれるのである。

川柳も亦然りであろう。

一九五三・一一一



息苦し電氣時計を見つめれば

皇太子さまを迎えて

タラツブを三度止つて御手を振り

米子市 美 鴨 美 笑

捨て犬の世話まで母の人の良き

ウインドを見てから銀行金を貸し

ホノル、市 白 砂 旋 風

女房に可愛がられるかぜを引き

どのやうな政治をしても貧乏し

下痢までを戦争のセイにして仕舞い

大阪市 正 本 水 客

立読みの一人薄着を自慢にし

花電車てれくさそうに車掌いる

雨の上六修学旅行の傘が派手

自轉車で宿の女中が先に行く

風速二十五米今日は帰れぬ顔になり

池田市 黒 川 紫 香

婦人席男の様な顔もある

くつしやみで起きて二号のつゝがなし

金魚すくい巡査ものぞいて通るなり

大阪市 丸 尾 潮 花

愛情を求める肩がふるえてゐ

嫁しづいてからは貴方と書いて來す

女なり体で返す金も借り

金の世と悟れば愛もみすくさく

三号が出來て二号も働かせ

愛情がいつか汚れた名で呼ばれ

三味置いて歌磨呂えがく型になり

寝ころんで女探偵本を読み

君と呼ぶひとあり死ねぬなと思ひ

女心へとけてやれない人になり

瓢箪のように男は出たまんま

氣の強い妻だ玄關までも出す

世間では切れてた筈のひと逢ひ

大阪市 北 川 春 巢

全拂い局は汚れた札をくれ

人相が戴帽式後ちと変り

生字引英語違つたまゝおぼえ

パイブルも読まず奇蹟も信じてす

引揚げて内地の狭き子に教え

内職を廣げ益々家狭し

岡山県 浜 田 久 米 雄

妻は満夫はかぞえ年にする

冷笑のたれかのひとみ感じた日

半年の禁酒を妻にうたがわれ

大阪市 武 部 香 林

老成と云われ仰げば雲流る

誕生日金のいらぬ企畫にし

蟻の道でないので蟻はつぶされた

雑談も出來ぬ小さい会社なり

一本の柳センチメンタリズムかしら

何時花が咲くかシャボテン僕に似て

明日も亦斯く燃えかしとサンセット

口実が出來飲み直す恐妻家

汗臭い父へ一人子しがみつ

怒るだけ怒り社長は二号邸

玉葱を切る時泣いただけと聞く

鳴き損であるとおもたか虫だまり

妻の待つ方へ電車はまつしぐら

颯風も裏から來る手知つたらし

池田市 戸 田 古 方

お連さんみたいに犬がついて來た

秋になつてヌード寒いば立てゝいた

尼崎市 水 谷 鮎 美

停年の間近に男の子が生れ

ほろ酔の手枕役者やめられず

おんな病みながら桔梗の水を替え

横浜市 福 田 山 雨 楼

冷害に備えて娘生んでおき

七十九不老長壽の大使なり

われ無理を愛したり身のおきどころ

大阪市 井 上 湧 三

上高地にて

白樺のロビーへ月が登場し

急流道草を喰ふ水のゐて

吹く風今宵しづかにすゝきの穂

大阪市 川 村 好 郎

妻の夏洗うては干し洗うては干し

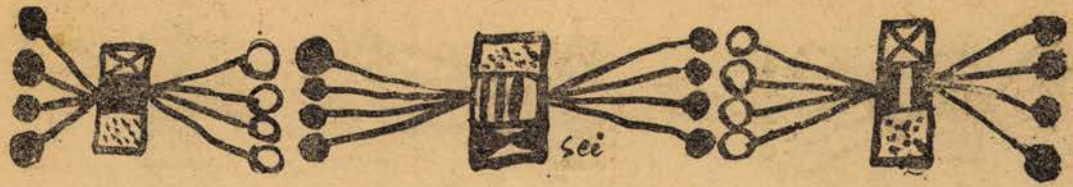
五十からですよと女將におだてられ

小唄を習つてるところだけ重役さ

子供があるのよと女打診する

ホノル、市 市 岡 曉 舟

後家と後家寄れば亡夫を擔ぎ出し



下関市 弘津柳 慶
瘦せたのが出て草角力わかえり
運動会父はそろ／＼酔つて来る

ペン／＼宿取締りに従事して

しどけなくオンリ寝床でガムを噛み

鳥取市 杉谷湖山

レデーモード身丈も金も手頃なる

おごることも言わすのれんを肩で入り

かまさりのよろ／＼秋の風を行く

電話口髭の威厳もなくて詫び

下関市 國弘半休門

瘠せ男ツカ／＼とハイヤ呼ぶ役

入港の眼を射るものに競輪場

天高く運動靴を買わされる

長女十七ブク／＼肥つてドウシマシヨウ

大阪市 山口秋花

や／＼こしい御代へその上ごまかして

主義よりも愛情は軽いものかしらん

見通しが暗い主食をどないする

減米の不安をよそにメシヤまで

御近所のおよしみが駄で赤い羽根

物凄く怒鳴つて見たがいぢらしく

見さかいがつかぬ歳でもないものを

古きづを隠すすべなく又盗み

吹田市 野本吞水

流産をさすよなバスで行く内科

ただ我に生を興えただけの人

お茶漬を味うほどは炊かぬ釜

猫もろて平和な家庭ちよつともめ

交際へばペーパナイフに似たる人

尼崎市 小林文月
扉に圧されやもりの如く満員車
待つ人に逢えずすすしだけ喰て帰り

大阪市 渡辺孫拙

向日葵の枯れた家にも訪ふ税吏

共産党ビルマで白い旗を振り

奈良県 飯降白香

沈黙を唯一の反抗としての嫁

女四十愛情も限りある如し

遮断器の群集おこつたように立ち

事もない日のくれ方よきれいな夕日

山口県 長野井蛙

天引で建てた我家の住み心地

案山子さえ今年は別な柄を着て

大阪市 上田春柳

朝鮮放送かけつばなしの秋の夜

疊あげ嵐に耐ゆる聲となり

暴風雨親子五人の顔と顔

岡山県 直原七面山

十二月そろ／＼恋の始末もし

金魚悠々火の車とは露知らず

仁医だつたらし葬儀の長い列が行く

針までも使う夫を淋しく見

胸の病ですのと娘悪びれず

純情は他人の前でしがみつ

大阪市 西森花村

降れば漏り吹けば飛びますわが生活

その次ぎも同じ薬で外科はすみ

恢復期よその科の方迄のぞき

我慢して外科医のぼちんにらんでる

美笑氏を訪う

料理屋と聞いて訪問ためらわせ

妊産婦罷り通るという姿

何もかも顔の拙さが遠慮させ

ふだん着のまゝがよかつた火事見舞

出張の儲け少なき夜具に寝る

兵庫県 家沢澁花

へそくりのあわれ千円札二枚

四面楚歌被害調査の列に居る

拾いものしたよに運動会が晴れ

十円貨飽く程ならべ玩具買い

櫓に自信あつて月見は沖へ出る

大阪城の次に目につく瓦斯タンク

東京都 藤本満年

秋の芝病氣上りのように伸び

東京の空が晴れてる傳書鳩

千円が貧乏くさい銀座なり

岡山県 福島鉄児

首にくる女の腕の蛇に似て

痛い程大きなお尻割込まれ

東京都 藤本茶々

この辺で笑わなければと皇太子

イヤリング中年の皺かくされず

大阪市 塩濱一路

落ちている葉まだ青くまだ若く

人間の怒り忘れて年を取り

ニコヨンがちらつと見せた正義感

大阪市 西いわを



人の世の争いごとへ萩の花

酔いどれになれない役を当がわれ

目隠しへ指の堅さを云い当てる

岡山県 横部 牛歩

氣の強い妻の看病ゆき届き

恢復期パイプの掃除ゆき届き

差入れの型でお粥を妻もて來

岡山市 服部 十九平

大空に落書するよに戦闘機

遺言に嫁への礼も言つて逝き

酒飲めぬことを悩みだなどと言

岡山県 大森 娛句樂

榮轉は左が過ぎてはゞまれる

特賞のミシンを夢の愛説者

尼崎市 長谷川 三司

不機嫌な顔へ算盤まで合はす

秋の灯へ酒は靜かに飲むべかり

妾宅の壁は芋錢の河童の画

熊本県 有働 芳仙

伸び切つたところでコスモス花をつけ

軍神の像屑鉄の中に寝る

夕焼へ蜘蛛サーカスに似た動き

出血サーピス等と算盤弾いて居

青雲も一度は三等車に揺られ

懸賞のついでの方の品を買い

他人事なのに涙ぐむ母であり

下関市 阪田 良坊

長女だけ母なき後で賣れ残り

子の部屋を覗けば繪本と寝たまんま

下関市 石川 侃流洞

田熟をゴルフに凝つて恙がなし

夜廻りのフツと變化のほしい晩

青い目を抱いて満員バスをよけ

岡山県 水田 千石

初咲きの菊で病室見舞われる

飲めそうな案内状へ行くときめ

利殖法破算の例も母話し

大阪市 山本 葉光

颱風の電柱曲つたまゝ燈り

男山武運祈つた過去もあり

材木のトラツクにバス睨まれる

大阪市 東 喜久堂

ベチャクチャと女お好み焼を喰べ

凶作か知らぬが草は生い茂り

倉敷市 木村 千容

疲れたと義理にもいえぬ我を通し

税金と利子を拂えばからつばさ

壯者を凌ぐなどおだてられ秋淋し

心臓は知らず半値で口を切り

心友三京一年にて逝く

電氣炉に入るだけだつた首都住い

倉敷市 田垣 方大

鳶一羽悠々水禍見おろせり

やつぱり君かと保安隊で逢い

石川県 那谷 光郎

不機嫌な社長へ祕書まで無口なり

癩癩のやりば雨戸を蹴つて繰り

さもしさは全集を金に見積る日

恋よりも出世をしたい位置にあり

大阪市 木村 水堂

世も末と思ふパチンコ屋が列び

慾捨てる程人間が出來ていす

堺市 八木 摩天郎

バスガールの眼には男が面白し

淋しさの果ては鳴子へさわつて見

夫婦もめ結局男寝るに決め

倉敷市 水谷 谷水

罵倒され罵倒し場末更けていく

お悔みを二号言われたのが口惜し

技巧過ぎ女本当に毒を飲み

お綺麗と言われて当座朝も塗り

掃除婦の誇り貞操まで賣らす

美人となら死んでも見たい夜の海

倉敷市 梶原 一善

孝行をするご今から予約され

言い勝つて見ても得するわけでなし

女にはおしい氣骨をもてあまし

岡山県 坂井 三葉

アイロンの主と結婚する噂

茶と花が趣味だと見合で云ふたけど

犯人の方にも苦勞つきまごい

岡山県 政田 大介

蔓がよいからだごと入学くさるる

謎が解けた時には女居なかつた

岡山県 臼井 三林坊

もう一度モラトリアムを希ふ僕

末ツ子が來て藥瓶はねこぼし

大阪府 青柳 扇子仙



ゴムバンド妻への服地つゝまれる
そうは言うけれどもし子ができたなら
未亡人やはり受身の恋となり

岡山県 岡村 牛耕

酔うてないどころか上着着ておらず

女事務ばかりがつんどすましごとり

女教師はすました顔で聞いており

苦勞したね易者が言へば泪ぐみ

台風が逃げて大きな釘を抜き

案内もせぬのにもやんと来て坐り

爺ちやんのような課長が落城し

茨木市 下山 清潮

役僧のおじぎは布施へ先になり

アドバルン浮世の風へ逆えす

均一の賣場は妻のねばるそこ

こゝからはお前にまかすと失業が

岡山県 本田 惠二朗

齒を抜いて帽子も傘も置いて去に

倦怠期になつて内縁あわて出し

恥なんてお互い様のものと決め

オウムのような相槌の頼りなさ

大阪府 眞鍋 一瓢

憐憫と知らず驕らせたど喋り

そつと酌ぐ酒も獨りの親しみよ

飲けるんでせうと年増が寄つて来る

染まりたい白鳥海は知らず居り

ガツタリと電氣時計の針進む

見殺しに出来なんぞと偽善者の

颯風十三号通過

のど元過ぎれば颯風を笑い合ひ

京都市 松川 杜的

政論もちよつびり番頭如才なし

秋の灯へ新刊パリツと音を立て

水族館カツバもいるかご子に聞かれ

パチンコに行くにも父さんひげを剃り

豊中市 村上 ゆずる

女事務酒へ自信を持ち始め

さんねるを出れば目にしむ彼岸華

爆弾で足らず水が大雨が降り

飲み代もこめて歳費の値上げする

同業の店覗いたを見つめられ

保険屋の條件通り燃えとらす

一等賞いつを混血憐れなり

岡山県 井野 格一

また自殺したかごニユース軽う読み

古参顔して女事務老いて居り

倉吉市 日置 文郷

隨筆が書いて社長は朝寝坊

空想をナースの声に乱される

榮養士Aが足らぬか眼鏡かけ

縣議又料亭一つ建てたらし

大阪府 佐野 牛歩

運動会先生の若さ見て帰る

聖徳太子廟小野妹子墓にて

學神へ子等はもう一度礼拜す

道問えば御陵も行けと教えられ

大阪府 小池 しげを

北浜へ来れば單価が大きすぎ

動物園だけで子供へ日が暮れる

縁談へ娘ちやんちやらおかしがり

倉敷市 松村 万古

二等車へ始めて乗つた鞆持ち

あばすれの苦手は人の情なり

倉敷市 藤井 春日

老人の日に淨瑠璃で泣かされる

カツとなる癖が社長の前で出た

平沢に似たのが入社リギョツとする

サラリーはいくらアチャラ製を着て

大阪府 木口 賀峰

大学生の方へ長女を嫁りたがり

ピンボケの寫眞彼女へ出しそびれ

午後十時愛を誓いて別れ行く

愛人が出来てお酒の量が増え

吞ましてはくれぬ女の瞳のやさし

岡山県 岡本 薫翠

日傭の弁当風呂敷色が褪せ

残業へ眞偽を質す電話が来

岡山市 津田 麦太楼

油虫まで男世帯を小馬鹿にし

すい〜と蜻蛉のやうに女逃げ

一号はむつつり二号はしんみりし

溝曳の宿でネオンの裏を読む

じいつと見て俺の傍へは掛けぬ女

米子市 小西 雄々

主婦として二度たしかめた風の夜

そるばんの話にアブレ眼をつむり

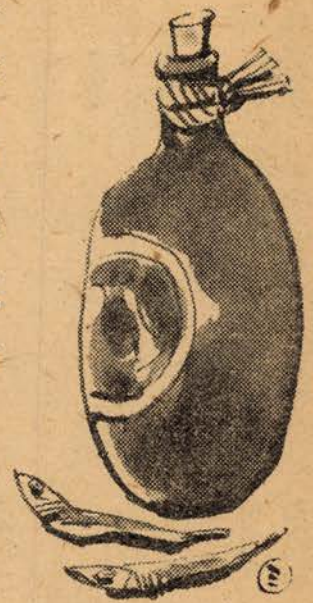
もう次ができてよといと世辞をうけ

税務署の近くと聞いて移轉止め

船世帯橋の上にも氣をつかい

川柳に詠まれた 歳末風景

語る人 須崎 豆秋・西森 花村
正本 水客・麻生 梨里



やつぱりで、相も変らぬ暢氣な連中のごとだろうと思ひます。

水客

任みなれた坂を下れば師走の灯 (九天)

これは悠々たる方ですね。

梨里 水客さんの心境でしょう。處でもうそろ／＼ボーナスの出る頃じやないでしょうか。近頃は越年資金などと云う名目に変つた處も多いようですが、兎も角もこうした臨時収入はサラリーマンにとつては、本當にうれしいことだと思ひます。

豆秋 花村さん處は何時頃ですか。

花村 十二月の十日過ぎでしょう。議会が通らななきません。公務員は本給の幾らと云うことが定まつてますからね。

豆秋 幾らくれるか初めから解つてたら興味がありませんなあ。

水客 豆秋さんごはボーナスは？

豆秋 僕ごは越年資金ですが、昔のボーナスと云う感じは出ませんね。

花村 ボーナスで父の腕前疑ふ

な (路郎)

のに失業をしていると云うのでは、全く目も当てられませぬね。

十二月と云うに求人欄を見て

と云うような、全くせつば詰つた人もあるわけですが……

豆秋 先生の句に、もつと物凄いのがありまつせ

十二月剃刀もつてこわがらせ

水客 これは女の人のすな。

梨里 そうですね。男だつたら剃刀は優し過ぎる。ピストル位でないごネ。(笑声)

水客 僕はあまり物凄いの嫌いごネ。

十二月うれしい風も少し

吹け (路郎)

おなじ不境でも、なごやかな方がい。

の句なんか僕に呼びかけられていた様な氣がします。

水客 貧乏と云えば

十二月貧乏もよいと云うとれず (梨里)

と云う句がありますが……子供達には新しい肌着が一枚づつ、妻には正月用の足袋が一足、配給米以外の餅米も少しは都合がついた。これで除夜の鐘も結構楽しく聞ける、こ

う云う貧しさはい。これは川柳家の貧しさやな(笑声)

子の涙を叱るばかりの年の暮 (一生)

これも貧乏な方でしよう。忙しいやら何やらでどうにもならない女のあせりが子の上にとんで行くのでしょうか。

梨里 まだその位の貧乏はよろしいけど、暮も迫つている

年の暮れみんなが走るから私も走る (茶々)

と云う氣持に巻き込まれますなあ。

梨里 豆秋さんみたいたいな暢氣な人でも、やつぱり年の暮はそんな氣持になりますか？

豆秋 僕ですか。僕なんか貧乏なので一年中が十二月みたいなのでね(笑声)常とあんまり変りまへんな。水車君の

君少しあわて給えと十二月

の句なんか僕に呼びかけられていた様な氣がします。

水客 貧乏と云えば

十二月貧乏もよいと云うとれず (梨里)

と云う句がありますが……子供達には新しい肌着が一枚づつ、妻には正月用の足袋が一足、配給米以外の餅米も少しは都合がついた。これで除夜の鐘も結構楽しく聞ける、こ

と云う句があるが、給料者の悲哀ですね。

豆秋II愛論君の句に

ポーナスはせめてワイフに封のまゝ

と云うのがあるが、ポーナスを封のまゝで出す人は少いのと違いますか。或る人はうまいことピンを引いて女房へ出すそうですが……

水客II袋を麥えてねえー。豆秋さんもその口と違いますが(笑声)

豆秋IIいや、僕はゼツタイに(力をいれて)そんな事しませへん(笑声)そんないらんこと云うてももたら、女房がこの雜誌読んだら困りますかな。

花村II僕とこは近所が同じ處へ勤めてる人が多いので、同僚の奥さん同志が連絡を取つてごまかさねないように用心して居るのであきません。一人が喋るとみんなわかつてしまいますからね。

梨里II昔はへそくりと云えば女の専門だつたが近頃は専ら男の方がへそくりをせんならん情勢になつて來ましたからね。處がこの男のへそくりと云うものは女のそれと違つて仲々大きくピンを引くので(笑声)生活にこたえますからね。女の人もうか／＼してお

れません。

水客II終戦後の食糧確保が男の責任だつた余塵ですよ。

梨里IIあら、終戦当時の食糧難には女の人だつて相当に活躍しましたわ。だからそんな事は別として、暮して行けさえすれば男のへそくりも認めてあげます(笑声)悪友と交際いもせんならんしね。

豆秋IIそう／＼パチンコ資金もいるしね。

梨里IIポーナスは貰うまでに色々買物もあるし、沢山計画も立てゝあるので実際に貰うとその夢の実現も取らぬ狸の何とやらで悲喜こも／＼の思いがあまりでしょう。

ポーナスをたのむ子の慾(翠光)妻の慾(翠光)計画はポーナスはるか上廻り(すゝむ)

ポーナスの悲哀ですね。花村IIまだ計画上廻る位ならまします。

ポーナスへ借りてる金を寄せてみる(港太郎)と云うような人もありますからね。貰うてしもたら後はシユンとしてしもて、酔が覚めたような氣持になりますわ。豆秋IIほんとにそうですか。水客II一抹の淡い期待でポーナスの何れは足らぬ

封を切り(黙平)

と云う処ですが、あけてみれば

ポーナスを借金取りが待ちあぐみ(魚児)と云う現実が待ちかまえている。

梨里IIそれほんどですか。水客IIポーナス日になる日頃殺風景な役所の廊下が、飲み屋の仲居さんやなんか來て、仲々なまめかしい(笑声)

花村IIこんな時に一方口は不便ですね。

水客II「花村さんはお留守です」と云つて居るのは花村さん自身ではありませんか。

花村II僕とこは入口に守衛がいるからね。豆秋II守衛に頼んで留守や云うて貰うたらい。

花村II明くる日になつたら大概もう待つてないからね。然し僕はそんな経験はない。水客II此処に居るものはみんなおとなしいから借金取りの経験なんかないね。(笑声)豆秋II何処できいてくるのかしらんが、ポーナス日はよく知つてますなあ、僕はポーナスを当に先に飲むようなことはしません、それでも

ポーナスを懐にしてそんな処に足が向いたらもうあきまへん。

水客IIパチンコ位にしごくんですな。僕はやりませんけど。(笑声)豆秋IIそれが凡夫のあきましさでポーナス日は決して眞直ぐに家へは帰れないものです。

梨里IIそれも他人の話でしよう。(笑声)水客IIこれは余談になります、僕の知つてる人が、飲み屋に行つたら、会社の知つた重役が來て居つて、飲め飲めと云つてすゝめるので、しきりに札を云いながら一番高いカクテルをどつて盛んにメートルを上げ、いゝ氣持になつて歸つた。処が二、三日したらちやんと勘定書きを持つて來られたので当てがはづれてダーとなつてました。仕方がないので金を借り歩いて拂つたらしいが、こんなチャツカリ屋もあるのでうつかり御馳走にもなれませんな。

梨里II今、白柳子さんから速達が來てね、今日欠席するそうです。

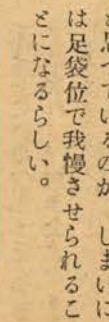
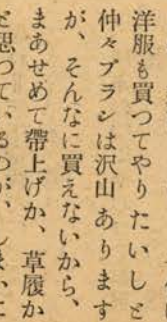
猫の手も人手も借れぬ職を持ち

ポーナスは心齋橋で迷いかけ(里十九)

花村IIポーナスを貰うと賣出しが目につきませぬ。何かしら買へ買へ買へと師走の灯(新坊)ポーナスを貰うたら何か買わんならん氣持になりますわ。梨里IIサラリーマンの奥さんと云うものは、ポーナスを樂しみにして、入ればお正月の着物も新調したいし、子供に洋服も買つてやりたいしと仲々ブランは沢山あります、が、そんなに買えないから、まあせめて帶上げか、草履かと思つて居るのが、しまいは足袋位で我慢させられることになるらしい。

暖房の一はい。又格別

アサヒボール



水客 僕ごこみたいや。(笑声)
梨里 それも心斎橋で迷うて
来たお蔭と違いますか。(笑声)
水客

子を叱り叱り賣出し見て
歩るき (山 辰)

と云うことになるわけです
な...商店街の賑やかな賣出
しの中で花屋だけがポツンと
穴があいたように静かなのを
句にして出しましたが没です
た。(笑声)

梨里 さらそうですよ(笑声)
花屋かて暮になつたらお正月
用のお花をかう人で黒山の様
ですよ。但しいよ、押し話
つてからの話ですけど。

水客 花屋だけは賣出しの仲
間に入つていないのですよ。
そう云う處を句にしたい。

豆秋 とう云えば公益社も入
つてない。矢張水客さんらし
い目の付け処ですな。

水客 或は入っているのかも
知らんが、賣出しはしていな
い。轆りや何かも出さないで
いるポツンとした感じを受け
るのですがね。また作りまっ
さ。

豆秋

謝恩とはうまい賣出し文
句なり (柳 葉)

と云うのがありますが、近頃
の年末賣出しは謝恩とか奉仕

とか云う言葉を使っているが
矢張り昔の歳の市と云うよう
な文句の方がびつたりしてい
ているですな。

梨里 少ないボーナスを当て
に賣らんならんで近頃の商
賣人も中々頭を絞るのでしよ
う。奉仕だとか何だとか云う

と云うわけが、近頃
の年末賣出しは謝恩とか奉仕

同 舟 近 詠

老夫婦だまつていてもわかるなり
独り者さしみがあるとのんでいる
氣まぐれに表掃いてる独り者
独り者部屋一面に脱ぎすてる
大阪市 麻生 葭 乃
「君の名は」を見た話手は五十すぎ
花替へる事氣安めの佛の日
消える虹なれば尊く美しく

でも結局は買わされるのだ
し、賣れば利益になるのです
からね。あの手、この手で頭
の痛いことでしょう。

賣出しの種はつきない百
貨店 (辭 歩)

水客 申しかし
万引も予算に入れて賣出
され (胡 蝶)

と云うわけで商賣もまた仲々
辛い。
花村 買わされる方も亦辛い

豆秋 一十万円也、二筆筆
箭の福引に引つか、つて、つ
いいらんものまで買わされる
んだからな。

花村 それでタワシを貰つて
当つた人の名前を見て歸りま
す。(笑声)

水客 一昨年、近所で某百貨

東京都 富士野 鞍馬

店に十万円に当つた人がある
のですが、現金と云つても商
品券みたいなもので、品物を
それだけ買わんならぬので、
近所を廻つて買物の注文を頼
んで歩いてました。処がやつ
ぱり妬みや何かもあつたので
しよう。誰も注文しなかつた
らしい。

花村 一番下は三円の券で、
あんなもの何にもなれしまへ
ん。やつぱり、あれやると得

万引は口説かれてるよ
うに泣き (瓜 平)

これは勿論美しい女です。
花村 万引のやりをこないで
すね。万引にもプロとアマと
ありますからね。(笑声)

梨里 賣出しも例え少しのもの
でも買える人には、来るべ
き新らしい年への希望もあり
嬉しいことでしょうが、それ
処でない人もあるようです。

賣出しの街履歴書を持つ
て抜け (水 客)

など心寒いことでしょう。
花村 履歴書ばかり書いてい
るわけにもいかず、無心状も
書かねばならぬ...

無心状となれば名文書く
男 (茂)

豆秋 年末では雇い手もなか
ろうから、結局借金でもして
年を越すより手はないでしよ
う。

妹へしが無い無心する師

走 (春 草)
先ず一番手近な処からゆくわ
けですな。
梨里 然し何処でももの要り
な月ですから、何処も同じ年
の暮で

人情の薄さを知つた十二月
 (翠 光)

と云う氣持を味合されるのが
落ちかも知れません。

水客 無心とは予感で知つた十
二月 (壽 彦)

辛いとは云つても無心をさ
れる方はまだ倅なわけです
ね。

梨里 大分話がしみつたれて
來ましたので、もうそんなこ
とは忘れて、忘年会とゆきま
しよう。

豆秋 忘年会費だけでは、こ
ても年は忘れられないのでつ
い

来年の櫛に手のつく年忘
れ (古 句)

となつたり、二次会、三次会
で夜が明けてみたり、さつぱ
りわやですな。

水客 繰り合せ繰り合せ忘年会
つき (生々庵)

十二月つき台倒れしそ
うなり (没食子)

と云う倅な悲鳴になる次第で

す。

梨里 十二月と云う月は男の人にはいゝ月ですね。今日は職場の……今日は親友同志で……今日は同窓の友人と……等々……と毎日天下晴れて呑めるのですから。

豆秋 〓 そりやあそうです。忘年会だけは万障繰合せますから。そこでどう〜お正月が来ん先にお腹をこわしたりするんです。

梨里 〓 常習犯ですか。

花村 〓 そのためにちやんと薬を用意しています。

水客 〓 忘年会がすむとクリスマスです。

サンタクロースの氣に入り

そうな雪になり (春 葉)

豆秋 〓 クリスマスの句は少ないですね。ハワイの人には、ありますが、こちらとは余程感じが違います。

水客 〓 暮の某新聞に二葉の写真が並んで掲つていましたが一つは三角帽子をかぶつてラ

ンチキ騒ぎをしている明るいキャバレーの内部で、今一つは電燈一つ灯かない闇夜の街頭にローソクを持つて讚美歌を唄う一團の人々、前者はキリストのない日本のクリスマス、後者は、唄も凍る朝鮮京城のクリスマスです。このコ

ントラストは川柳的だと思ふのです。

梨里 〓 キリストの誕生を祝うクリスマスは行事も日本では概念が違うのでクリスチャン以外の人には、單なる賣出しの裝飾か、キャバレー等の人を集める名目でしかないわけ

です。

X マス券そろ〜男寄り

つかず (水 車)

豆秋 〓 いや〜押し詰つて大晦日ですが昔の句には借金の断りの句が圧倒的に多いですが、今とは大分違いますね。

梨里 〓 現金買いの多い今日では大晦日の苦しみも昔のそれとは余程違うものがあるでしょうが、それでも、ぎり〜

一ぱいお正月を迎える準備は要るわけですし、病人の方が氣にしている

晦日 (比出路)

など、現在でも通じる穿ちの句ですね。

水客 〓

大晦日一の得意は遂に留

守 (玉兎朗)

これは商賣人ですね。

梨里 〓 大晦日になると男の人は割に暢氣ですね。うちの近所の人でも、毎年大晦日に映画を見に行く人があります

が

女はその点、死にものぐるいで

水客 〓 大げさやな。(笑聲)

梨里 〓 〓 云う程でもありません

んげど必死ですよ。(笑聲)

水客 〓 同じことやがな(笑聲)

その交り男は年中必死に働いているので箸紙を書いたらしまいで

豆秋 〓 女はそうは行きません

よ水客さん、お正月のお煮メ

やら、掃除もせんならんし、

着物の手入れもせんならんし

子供が多いとそれだけのこと

をせんならんからね。

梨里 〓 それから何も彼も出来

てその上でお風呂に行つて、

それから

大晦日晴かけて髪が出来

(雨 吉)

と云うことになるのです。それなのに、男の人は外で呑み

歩いたあげく、

友達に別れた時がお元日

(路 郎)

と云うようなものですね。

豆秋 〓 そんなに暢氣な人ばかりとは云えませんよ。まだまだ

だ集金が残つてますもの、除夜の鐘が鳴るまでは何が何でも

頭張らなあきませんから

な。それでも除夜の鐘が鳴つたらもう何も彼もおしまいで

す。

貸したのが結局負けて除夜の鐘 (生々庵)

水客 〓 あきらめて商用先から

汽車に乗り込むと

東海道走つてる間にお元日

(豆 秋)

です。

梨里 〓 どう〜昭和廿八年も

終ります。どうぞよいお年を

お迎え下さい。(梨里筆記)

飛・燕・往・來

安川久留美氏(金沢市)へ

一 路 郎 耶 り

五年ぶりで禁酒をやぶつたとの

こと、いもの味を説いている方が

野趣があつていゝね。小生は一回

に二三合、イヤ二三本のむ、日に

二三回のむこともあれば二三日、

のまぬ時もある。宅でぶつ通しで

原稿を書いている時にはのまない。

外へ出ると殆んどまなない時はな

い。番傘は押入の下積になつてい

るので、おもとめのもの今書けな

い。毎日多忙で食事も机の上でや

つている始末。雑誌、新聞、ラジ

オ、句会、職域の会、句集の編集

全くやりきれない。十月二日

上野錦水氏(小松市)へ

一 久留美より

が、引つゞきアルコール分無くて

はおさまらぬ日がつゞき、けう

(七日)も秋のお祭りで朝から一

杯傾けました。フシギにのんべい

の所へはのんべいが訪ねて来る、

いうまでもなく最少五合持参で

す。祭りといつても川柳人は型は

ずれ、鯉の鱈づけに、紅生姜、鮭

の切れ身と海苔のつくだ煮、いも

の子に小鯛の焼煮それで足らぬか

ら金時豆のむし煮を少うし、箸の

動くまゝに胃袋へ送つていきます、

吉川英治氏の旧作ではないが、

ひとりでう膳に

ポツント紅生姜、

で、山の神も忤も不在、留守番と

して二合瓶をあけるところに妙味

津々。菓子行商に飛ん歩く柳村君

よりも幸福のようです。そのうち

何? 川柳誌送り升。よろしく。

十月七日午後

胡桃人

瓶の銀山

大阪市長区大津町
西通一丁目四四
山銀硝子株式会社
電話四四七番



新川柳鑑賞

麻生路郎

床の上で散つてしまつたが、花自身は床の上で散るうなどとは夢にも知らなかつたと云うのである。擬人法の句であり、諷刺句でもあるところ、この句が異色ある句としての魅力を發揮していると思ふ。

(二二)

悲しみを蛙ケロケロと
しか鳴けず (野甫)

蛙の鳴き声ばかりは聴く人によつて違ふ。夫婦喧嘩の絶え間のない夫妻にとつては夫婦喧嘩ばかりしているようにも聴えようし、あまいさゝやきの二人にとつては、恋の伴奏とも聴えようし、音楽マニアにとつては一つの交響曲とも聴えよう。蛙自身にとつては食欲を訴えているのかも知れないが、この作者の耳にはケロケロと鳴いているのが哀調として聴けたのであろう。

「今夜の夜行で北國へ発ちます。お聞きしておくことがありました」と社長の前で若い社員は頭を下げた。
「そうかい。それは御苦労だね。あちらはもう雪だろう。まあしつかりやつて来て呉れ。オ、そう、君はたしか金沢の近くだつたネ。あちらへ出かけたら、一ト晩ぐらい母に顔を見せてやれよ」と云う社長の人間味を詠んだ句である。

(一九)

お父さんの様になると
はいちらしい (淡舟)

こどもも小さいが、父さんも、まだそんなに年をとつてはいないことが句を通して感じられる。しかし、このお父

(二〇)

床の上で散るとは花も
知らなんだ (宏方)

おそろしく冷ややかな句である。青空の下で美しく咲き誇つていた花が、美しいがために床に活けられ、遂には

(二二)

素人のなすびは十一月
もなり (春菓)

作者自身が、そういつた心の状態におかれていたのであろう。観察の鋭さと、感覚の繊細さに於て秀れた作である。蛙の鳴き声もところによつて違ふので、この作者が「ケロケロ」と表現しているのも面白く思つた。

柳界展望

▼本社十二月旬会は恒例により師走川柳大会として十二日午後五時半から下寺町二丁目市バス停前光明寺で開催。支部対抗句戦、福引があり盛大に催される。

▼山陽新聞記者川柳大会が十二月六日午前十一時から岡山市遺族会館に於て開催せられる。第五回大阪市民川柳大会は十一月十五日午前十時から毎日新聞社講堂で開催。大阪南区医師会文化部杏林川柳会は十一月二十四日午後七時半から比呂史居で開催。南海電鉄川柳会は十一月廿三日午後六時から粉浜の親和寮で開催。川維界支部では堺川柳人グループ協賛の下に復活一周年記念川柳句会を十一月廿八日午後六時から摩太郎居で開催。大阪通信病院川柳会は十一月廿一日午後二時から三階図書室で開催。関西西電力川柳会は十一月廿五日夕、例会開催以上何れも路郎主幹出席。

▼川維界川柳会は十一月四日午後六時から香林居で開催。大阪市交通局川柳会は十一月十八日午後五時半から交通局病院で開催。三井鉱山日比製煉所川柳会は十一月六日午後六時興比会館で開催。川維界支部は十一月七日午後六時から七面山居に於て開催。水島公民館川柳の会(倉敷市)は十月二十一日夜開催。川維岡山支部は「山陽川柳」出版記念大会として十一月十五日山陽館に於て開催。当日ラジオ山陽に録音。川維鳥取支部は十一月十八日午後六時鉄洲居に於て十一月旬会開催。中国川柳の会は十一月八日午後一時半から市内魚光旅館に於て開催。秋田川柳社は十一月九時九時から同社主催、おぼこ川柳社、五城目町川柳鈴虫吟社、能代市川柳いかだ吟社後援の下に秋田川柳社設立記念川柳大会兼第十八回全県川柳大会を秋田市千秋公園内松風亭で開催。広島鉄道管理局管内川柳大会を十月十七日山口県湯田、湯田鉄道保健指導所に於て開催。諷柳会(岡山県)は十月十六日野川居に於て氏神祭奉納句会を開催。麻生路郎師選評「山陽川柳」が十月十五日に岡山市東山下町四〇山陽図書出版株式会社から刊行された。定価二〇〇円、送料二四円(別欄広告参照)。富士野鞍馬氏夫人(東京都)が退院されましたが、衰弱されていられる。そで、お案じ申上げている。一日も早く全快されるようお祈りする。

▼米沢晴明氏(愛媛県)は十月十六日伊予面河溪に遊ばれ「天然はかくも美し面河溪」の句信を寄せられた。なお同氏は十一月十日本社を訪問されたが路郎主幹が不在のため、娘乃女史と欲談して帰郷された。梶川藤堂氏(吹田市)のたよりによると十月十三日公用にて名古屋に赴き、新人川柳家を連れて伊志田孝三郎氏を訪問、談話された。若本多久志氏(大阪市)は十

秋も十一月ともなれば、そろ／＼寒い風が吹く。日曜の晝を我が家の裏にある猫の額ほどの畑に立つているのは安サラーマンの一人に違いない。小さななすが、ポツン／＼となつてゐる。十一月になつても引き抜かないのである。そこが素人の味かも知れない。

多少ユーモア味も感じられるし、軽い穿ち味もあつて、ほほえましい情景の句である。

【二三】

片言が素破ぬいてたと
はしらす (凡九郎)

「ウチ、今日、お客さんやネ。仲りさんが来てはんネ。」
「アラ、そう。」
「姉ちゃん、お嫁入りするねん。」
「そう、いつ？」
「いつや、知らん」
これでは片言ならんが、まア／＼こんな会話で、スツカリ知れ渡つてるとは知らないで、姉はいつものように、澄まして歩いてゐる。

「あなた、お嫁入りするんだつてネ。」
「いゝえ。」
「でも、みつちゃん、云つてたわ。」
「アラ、アラ」

【二四】

細長うやつてまんねと
未だかつぎ (びか平)

敗戦後八年になると云うのに、私たちはまだ汽車に乗ると、かつぎ屋に、足の下へ米らしい風呂敷包みを押し込まれるのである。そしてその人たちは汽車が停車するたびに、あらぬ方を警戒している眼に、ブツつかるのである。中には汽車に乗るなり、エプロンを外し、コートを着たりして一般乗客に見せかけようとしてゐるが、それがムダな努力だとは気がないようである。一見してすぐ、未亡人のかつぎ屋だと知れるからである。

【二六】

約束を破らす様な雨が
降り (季 贊)

「いくら約束でも、こんな雨に出て行けるもんですか。しばらく休んでいらつしやい。今に小やみになりますよ」と云われるとそれもそうだと思つて、一寸尻を落ちつけた。ところが、雨は小やみになるどころか、次第に強くなつて、風さえ加つて、まともに向いて歩けそうにもない。もう暫く待つてと思つてゐるうちに、さう／＼出かける時間を失つてしまつたと云うところを巧くごらえてゐる。この句、どんな約束であるのか、どんな人物であるのかは判らないが、それは問題にしないでも面白い句だ。

【二五】

早よう去んでほしい火
鉢へ鍛をさし (照 子)

家庭川柳としてなか／＼すぐれた句である。單なる家庭の主婦であるのか、仕立物いたしますと云う、ほそ／＼と縫い物をして暮らしを立ててゐる未亡人であるのか、そこどころはハツキリしないが、それはどちらであつてもいゝだろう。いづれにしても、大した用もないのに、いつまでも話し込まれて困つてゐる情景を「火鉢へ鍛をさし」で巧みに表現してゐると思ふ。

三月十一日金沢の安川久留美氏を訪問、路郎師の事など一夕語り合はれた由。鳥井川鳥氏(愛媛県)は川維三ヶ年間から感吟五百句を抜き石根川柳会の人達へ回覧され由。藤田一三夫氏(大阪市)のお嬢さん茂子さんが十一月五日七日、八日の三日間朝日会館で開催のバレエ公演に出場された。上野錦水氏(小松市)は十一月四日伊勢神宮霊宮参拝一行に参加し「踏む砂利の木立にひびく朝詣」の句信を寄せられた。本社訪問の予定が疲労のため京都からすぐ帰郷された。沖一糸氏(岡山県)は十一月五日不朽洞へ来訪、路郎師の案内で大阪を視察して帰岡された。中野懐窓氏(横浜市)は夏以来病床に親しまれてゐる一日も早く快癒を祈る。福田卓風氏(石川県)は十一月十四日夕、本社へ

第四回 山陽新聞読者川柳大会

日時 十二月六日(日) 午前十時
場所 岡山市下石井 岡山県遺族会館
兼題 「相 談」
「婚 約」
「坐り込み」

賞 各題三句以内
★知事杯ならびに副賞、知事賞「兼題「菜」」の天位
★県会議長賞「同地位」★市会議長賞「同地位」
★山陽新聞社賞「その他の兼題の三光(出席優先)」
五十円(但し授句のみの場合は三十円)
岡山市下石井山陽新聞社内第四回読者川柳大会宛
十二月二日着便のこと

會費 授句先
主 催 山陽新聞社

山陽新聞社

(摩)



平清盛 (三)

富士野 鞍馬

清盛の二女徳子は、高倉帝の後であつたので、高倉帝御寵愛の美人、小督の局は、清盛に憎まれた。それをおそれた小督は、安元元年(一一七五)八月、御所をぬけ出でて、嵯峨にかくれた。

仲國といふ宿直の士に命じて、探してつれ戻されたが、これまた清盛に知れて、小督は尼にされて再び嵯峨にかくれた。といふ物語は有名である。

仲國は西八条へ不首尾なり

(タル十五)

治承元年(一一七七)には、俊寛、康頼等の一味が、京都鹿ヶ谷に会合して、後白河法皇を擁し、平家打倒の陰謀をめぐらしたが、裏切り者行綱の密告で現われ、一味はそれ／＼處罰されたが、清盛は後白河法皇を、鳥羽の北殿へ押込めるか、九州へでも流

白河法皇の女御であつた。座敷牢鳥羽の離宮をはじめ也

(拾 五)

治承四年(一一八〇)五月には、高倉帝は安德帝に位を譲られ、源頼政は、以仁王を奉じて、平家打倒を企てた。安芸殿ははむきがいと源

三位 (タル十四)

これは、頼政の敗北となり、六月三日には、清盛の理想の地、福原(神戸)へ、安德帝を奉じて、都を遷したが、輿論不賛成が多いので、その年十一月二日に、また京都へ戻した。

新都では海はつかりを諸郷ほめ (タル十四)

十月には、孫維盛の軍が、源頼朝の軍と、富士川をはさんで對陣し、水鳥の音で逃げ帰つた。これも有名な話である。

平家方寝耳に水の鳥で逃げ (タル九三)

富士川はほんの赤恥かいたとこ (拾 四三)

富士川で三味線を折る白拍子 (拾 六三)

ぬかぬ太刀とは富士川でいひはじめ (タル二七)

水鳥は逃げひよ鳥はさいごなり (拾 十二)

十二月には、五男重衡、甥通盛を、奈良へ派遣して、興福寺や東大寺を焼討した。この報いで、清盛は大熱病になつた。ともいわれている。治承四年は、清盛にとつて、まことに多難な年であり、平家の衰兆が現れている。

治承五年(一一八一)一月十四日には、高倉上皇が二十才で崩御。それで清盛の女建礼門院は二十五才で皇太后となつた。

越えて二月二十七日、三男宗盛は、源氏追討のため、東國へ出発といふことであつたが、その夜から清盛は、ひどい熱病になつた。

清盛は初手はおこりだなどといひ (拾 五)

清盛も時疫だらうと初手はいひ (拾 五)

まあオコリか流行熱だらうといつていたが、非常な大熱でさつぱり下らない。「平家物語」にも大そうに書いてある。

「入道相国病つき給へる日よりして、湯水も喉へ入れられず、身の内の熱きことは、火を焚く如し、臥し給へる所四五間が内へ入る者は、熱さ堪へ難し」

「比叡山より千手井の水を汲み下し、石の船に漕へ、それに下

りて冷え給へば、水おびただしう沸き上つて、程なく湯にぞなりにけり」

それを川柳は多く取りあげて

清盛の医者にはだか

清盛の医者脈を見て火傷をし (タル七二)

湯にはいる時入道はぢうといふ (拾 六)

清盛のあくび硝子體のやう (タル一一八)

入道は冷えた女を (拾 六)

ゆで蛸のように清盛くるしがり (タル三五)

ゆで蛸のやうにいもが子あつがりて (拾 八四)

清盛の病氣見舞に竜吐水 (拾 三五)

清盛の御符に綱書いてやり (拾 五)

熱にうかされて、いろ／＼なうわ言をいつたので (拾 五)

宮島の景色をしやべるきついで (タル十四)

この時の医者

の診断は「ギヤク」といつているが、それは、宋との交通があつたので、悪性マラリヤだつたかも知れない。

看病に仏御前は手がほめき (拾 五)

さういふ句があるが、これも誤詠で、佛はずつと前から清盛のそばに居ない。

この大熱は一週間続き、翌閏二月四日、遂に正妻二位尼をはじめ、宗盛等一族に見まもられて、この世を去つたのである。

清盛は末期の水をあびるなり

(タル三三)

入道は真水をのんで先へ死に

(拾 五)

一門は水清盛は火でほろび

(タル六九)

火となつて水にほろびる二

十年 (九八)

清盛の死出に湯となる三途川

(一五三)

清盛の幽霊不動かとおもひ

(五六一)

「平語」には

「遂にあつち死にぞし給ひける」

とあり、また

「さてもあるべき事ならねば、同じき七日の日、愛宕(おたぎ)にて烟になし奉り、首をば圓実法眼頸にかけ、摂津の国へ下り、経の島にぞ納めける。さしも日本一州に名をあげ、威を

ふるひし人なれども、身は一時の烟となつて、都の空へ立ち上り、屍はしばしやすらひて、浜の真砂に戯れつゝ、空しき土とぞなり給ふ」

と書いてある。六十四才が最後であつた。

始皇から見れば清盛小僧なり

(拾 五)

清盛の豪華も、奏の始皇の

しかし、一九五三年には、宮島で清盛祭が、盛大に行われた。



一枚のはな紙

麻生路郎

「君、そこらを散歩しようじやないか」と、Kさんは私を戸外へ連れ出された。家から一二丁出たところで、道ばたの草の上に腰を下した。そこは土堤のようになつていて、すぐ向うには甲山が手にとるように見えるところだつた。もう三十年以上も昔のことなので、季節がはつきりと記憶に蘇えつて来ないが、晩秋のころだつたかとも思う。空気が澄んでいて、何んとなくすがすがしくつた。二人並んで足を土手下の方へダラリときながら、Kさんは静かに袂をさ

ぐつていられたが、皺だらけのはな紙を一枚出され、それをひろげながら、「今日は持ち合せがないから、これを明日でも会社の窓口へ持つて行つて下さい」と云われた。そして皺だらけのはな紙へ金額を書かれ何の某君へお渡し下され度と私の名を鉛筆で走り書され、その下の方へKと御自分の姓を書かれただけであつた。それには日付も何も他の文字は書かれなかつた。私は「有難う」と云つて其のはな紙をポケットに入れたが、まるで二号さんが旦那からお手当をいたゞいてるようでお手当が、まるで二号さんが旦那から何だか変な気がしないでもなかつた。いつもなら午前中に伺つても、夜遅くまでお座敷でお酒のお相手をして、帰りにお金をいたゞいて来ることになつていたので、此の日に限つて散歩に引張り出され、土堤ではな紙へ記るさ

た支払の司令書のようなものを貰つたのである。毎月いたゞいていた此の金についてはKさんの奥さんも御存じはなかつたらしい。私は翌日、Kさんが所長をされてる会社へ出かけ、そのはな紙を窓口から突き出したのである。ところがすぐ現金が私の手に渡されたので、さすがに私も驚いたのであつた。おそらく私は一寸お待ち下さいとか、一寸お這入り下さいとか、コレへ領収証をおかきなさいとか云つて書類でも渡され、本人であることをたしかめられ、ハンコの一つも押さされることを予測していたのであるが、相手の顔もロクに見えない窓口で、そのはな紙一枚がすぐ様、現金になつたのである。しかも、それが私の一ヶ月の生活費でもあり、研究費でもあつて、私にとつては大金だつたのである。私は此の時ほどKさんの偉大さにうたれたこと

はなかつた。会社でも机上には何一つ置かれていないし、手紙などは読むとすぐ、机の下に置かれたクズ籠にすてられ、机にいられる時はいつも居眠つていられ、技師長などが仕事の報告に來ても、聞いているのか判らぬが、机によつて居眠つていられる前に立つて報告だけしてサツサと引揚げるのだと聞いてはいたが、その全人格が所員に徹底されていて、所長の筆蹟であれば、はな紙に書いた命令でもサツサと処置されている事実がブツ突かつたからである。

私は永い人生の旅路に於いてろんな仕事をして來たので、随分多角的に各方面の人物に接触したが、未だにKさんほどの偉い人がは会つたことがない。Kさんは背の低い、ボテツと太つた遠慮たイブの人で、なか／＼の酒豪であつた。某大会社のニューヨーク支

(十一月十九日BK「ラジョ絵葉書」放送原稿採録)



路郎選

魂もすける程のおぼれよう 兵庫県 森本 花子
 同じ喰ふだけなら世話になりません
 雨の宵お伽話で寝て見たく
 君故に婚期を惜しみなく過し
 お七にもなれぬ思いに身をこがし
 便りさえ届かぬ人になり給ひ
 虫の音が死んでしまえと云うよ
 市役所の玄関口にイギリス字 今治市 長野 文庫
 自動車は進歩し道は朽ちてゆく
 逆コース出来た拜殿総檜
 履歴書を一行ふやすため渡米
 士族より父が文士であつたなら
 全集の競争歴史は繰返す
 その当座手紙々々で日を過し 大阪市 石居 高志
 頼るのは貴男だけよと言ひ寄られ
 来て見れば別に交らぬ西東
 月賦屋が追ひかけて来る移轉先
 親の夢この子にピアノバイオリン
 奥様があるから嫌と逃げられた
 オルゴール鳴ってアダムミイヴの部屋 大阪市 藤村 梨花
 人生はそんなもので寝てしまひ
 商店につとめ倫理が邪魔になり
 クイツクくスロー悪魔五にやこし
 人の世のきびしさ親友までも賣り

窓に凭る女のせなは抱けと云う 具塚市 宮本 甲馬
 商談の嘘へ奥さんお茶をつぎ
 親爺々々買うからお世辞もうよろし
 復縁を拒む紫煙が立ちこめる
 退院をするまで左派として泳ぎ
 プラスにはならぬせつかいしうなり 玉野市 渡辺あきら
 お祭やそうなど秋刀魚たべながら
 一人では帯も結べぬ嫁が来た
 隔離を見舞う
 隔離舎へ移れば花も持つて来す
 旅の情ナイフを貸せば柿を呉れ 岡山県 小原 宇柳
 高飛びをするほど金を委されず
 旦那へはまさか紐ですとも言えず
 この人も善人だろう話好き
 ほめ方もあるもの寝顔ほめて去に 姫路市 難波 愁夢
 子が皆んな寝て妻らしい口をきく
 唄の会藝者師匠の格で来る
 口説かれた女は酔ふた振りをする
 うるさい蚊頬を叩けば眼鏡とび 岡山県 春名 米花
 隣席へ坐山戯ながらに酌いで呉れ
 満員も愉しからずやもたれ会い
 巡りあい立派な方が頭下げ
 税務署と聞いて座布団敷き直し 岡山県 小林 夢介
 億と云ふ損害僕にピンと来す
 大望が風呂敷包一つ持ち
 定紋の風呂敷で負う祝餅
 禿げたのへ結局女給腰をすえ 大阪市 森 文夫
 妻の留守我家のどこか整はず
 惚れられてゐるは知らずノーチップ
 遊ぶ日の顔を女將は見逃さず

浅間の宿

井上湧三

上高地へ出かけようとの夜の新宿
 を発つて松本へ着いたのが朝の五
 時十五分、駅からどつと流れ出た
 乗客が眠つた街の空気をにわか
 にゆすぶつた。二、三日来の雨で上
 高地へのバスもけさは出ないらし
 く待合所も硝子戸を固く閉してい
 る。だしぬけに駅横の電車フオー
 ムから発車のベルが鳴つた。耳を
 醒せんばかりに響く。その時旅の
 二人は反射的に足を揃われて思わ
 ず乗車した。いわば急に夢遊病者
 となつて電車の走るに任せ心うつ
 ろに浅間温泉へ向つたと云うので
 であらう。

「浅間にはい、旅館でもあるので
 しようか」と真向いの席へ声をか
 けた。紺の単衣を着た五十近い見
 るからに温顔雅容の紳士である。
 懐から週刊読売をのぞかせて英
 字新聞を掲げている「まだ朝が早
 いんでも寝てみましょう。よろ
 しい、僕がいつしよに行つてあげ
 ましよ」と懇ろな話である。廿
 分もすると終点にきた。人の情を
 嬉しく味いながら一しよに歩き出
 した。「松本にはたしか大学があ
 りましたな」「あ、信州大学です
 か」「学部は法経でしたか知ら」
 「いや、文理大ですよ」紳士はあ
 るいは大学の人かも知れぬぞと心
 に画いては随いてゆく。二〇〇米



コンクリの塀が網島大長寺	京都市	堀口	欣一	奈落とはこんなに蜘蛛が巢を作り	同
女の自由は背中にボタンつけ	同	同	同	年功が最前列に押し出され	同
北浜へ今日も来て居る元署長	同	同	同	停年のない店番で父は古い福岡県	同
乗ものが好きでやつてるわけなし	同	同	同	李ラインへ続く海とは見えぬ風	同
傷ついた心で娘どこへ嫁く	大阪市	石川ひさみ	同	善人の用だけ云うに骨が折れ	同
失恋作家フロン私のことでもつか	同	同	同	お客より亭主が欲しいビールなり	同
水盤の水の動かぬのも秋か	同	同	同	出世した子が手をとつて伊勢の旅	同
自殺するための薬を帯にはせ	同	同	同	集金の鞆パチンコ素通りし	同
パチンコの機嫌口笛吹いて去に	大阪府	則武	朗郎	生活の相違へ耳輪ゆれて居る	京都市
育兒本僕もこうして育てられ	同	同	同	西陣に勤めて帯はまだ買えず	同
棟梁はまだ方角を頑ど云い	同	同	同	春風の誘ふ芝生に子とありき	同
病人に紅の濃さを云われたり	同	同	同	肝心のとこが破れた時間表	大阪市
子の見舞栗の皮だけ置いて去に	具塚市	津田	千舟	停年の父百姓のようななり	同
心得て鯖もラインの内へ逃げ	同	同	同	俺ですら解けるクイズのまだ解せ	同
看護婦も医者の不器用さを認め	同	同	同	好きだからこそ心配をしているのに	倉敷市
カツギ屋に人造米をくさされる	同	同	同	恋人の歯並びに似た柘榴の実	同
金策の牛へ涙で妻送り	岡山県	國正兼比羅	同	サラリーを知つて仲人二度と来ず	同
荷車の兄へすまないトコで越し	同	同	同	医者或日未亡人にして見たく	岡山県
魚屋も声をかけない暮し向き	同	同	同	年頃は笑いに逃げる部屋がいら	同
ベン先の二銭の頃から事務の隅	同	同	同	まだ豆の命があつたゴミ捨場	同
プランにはなかつた筈の酒がつき	岡山県	杉本	竜仙	下駄の緒へ妻四十の濫き見せ	広島県
パンガロトナイフで料理頼まれる	同	同	同	へそくりをねらう廣告派手に出し	同
温泉も入れたプランの神詣り	同	同	同	倦怠期などと笑える仲のよき	同
借金で食ふて止めぬ人の世話	山口県	山口	秋穂	聖書片手に若さすりへらし	大阪府
愚痴云わぬ妻で何だか頼りない	同	同	同	寝姿に隙ありそくなさそくな	同
嫁く時の借りがすまぬに早や産衣	同	同	同	職業意識か男何とも思つたらす	同
基地と言う名が紅葉まで忘れさせ	滋賀県	久保	和友	しめつばい女給大正めいてもて	大阪市
ポスターに感心をしてまだ買わず	同	同	同	女房も知らん顔して競馬に居	同
夜なべする母が知つていいネオン	同	同	同	女房の馬券のカスも哀れなり	同
ぜんざいどしどしエレベーターで降り	吹田市	梶川	蘇堂	初恋を時々反芻するベッド	具塚市
					伏見
					次郎

も行けば落つた大きな構えの瀛の湯へ来た。紳士は勢よく宿屋へ声をかけてくれた。女中が眠そうな眼でやつと出てはくれたがさすがに返事が重い。「室が無けりや他へ案内するよ」と風の様にそこを飛び出した足へまたしても随いて行く。三度目に訪ねたのが目の湯である。広い植込をぬけて紳士はつか／＼と玄関を上つたかと思ふと硝子戸から頭を突込んだ態は今度こそどうでもとかけ合つてくれているかに見える。やがて女中がワンピースで顔を見せた。「離れの二日間続きなら空いていますそれがそれでおよろしいなら」との事である。御願いしよう二人は突破口を見つけた様に勢いこんで転び上つた。途端に後から声がした。

いつの間に来たやら若者を連れだ男がそこに突立っている「御迷惑でなけりやその隣りの室へお願い出来ぬでしょうか。ほんの二時間も寝ればいゝんですが」突然のこと一寸声をのんだが「え、よろしい。お互いです」と茲に都合四人がこの朝の客となつた訳である。さきの紳士はと見ると別段湯に入る様子もなく「まあ、結構でしたね」と懇軟な言葉を残して踵をとつて返した。

室に落ちついてから間もなく女中に聞いた。「さつきの人はどこの方、あとで御礼を申さねばならぬが」女中は暫し笑つた。そして



好きな娘はちと年令が違い過ぎ
 新妻に母校も見せる京の旅
 空き腹に應える秋の暮の鐘 貝塚市 小田 柳雙
 恋もなし失恋もなし老淋し
 表札に本名も添え万才師 同
 持ち逃げは又労組の幹部なり 大阪市不二田一三夫
 旅に來た駅前やつぱりパチンコ屋
 今頃になつて外食祭のこと 同
 久方の里の手打が長すぎる 愛知県 岩川 寛虚
 高潮え挑むに小さき鐘の音 同
 故郷の澗よし秋の顔写す 同
 倉庫の角にも油を賣る將棋 岡山県 繁松 玉露
 斗病が神の力をまだ信じ 同
 君の舟油を残してふり向かず 同
 商人がさわいだゝけの秋祭 愛媛県 村上 旭童
 あのひげにどうとついで甘える氣 同
 近寄つて見るものでなし曼珠沙華 同
 尾を踏んで犬と一しよに慌てたり 石川県 福田 卓風
 賣れ残り虫屋泣かせて帰りに行く 同
 芋ばかり喰つた思い出もう御免 同
 因習に勝てず祭を支度する 奈良県 絹下 南天
 菊の香へ俗に生きてる身を愧ぢる 同
 思ひますなあとは医者の方より 高田市 戸田 麻由美
 女客待つてた様にコーヒ出し 同
 意地で追ふバツタに川を飛びこせ 大阪市 佐藤 房子
 家出までしたと見えぬ倦怠期 同
 鳥巡り貝がら拾うコレクシオン 大和 戸田 悦子
 まだ馴れぬ花鋏だと思ふ菊 高田市 同
 グラビヤにある百姓の深い皺 京都市 鈴木 誠史

象牙箸九谷茶碗とあるゆとり
 スイッチの便利こわがる里の母 大和 戸田 嘉一
 妻へ折渡して袴の紐とさき 同
 本当の恋もしたわとまだ賣れず 貝塚市 芝原 洋史
 老眼鏡四十五とはちどあわれ 同
 落ちぶれてその肩書を持てあまし 大阪市 大西 可笑
 日記には素直な恋を書いてあり 同
 手術は終る肋骨二本抜いたまゝ 大阪市 有元 文子
 人造米胃袋はまだ抗議せず 同
 これだけの金で死なれる年でなく 大阪市 清水 望峰
 浮氣する亭主が婦徳押しつける 同
 道草は薄を折つて來た子供 京都市 松下京一樓
 おごなし視ればグロブ繕う子 同
 ラストだけ踊る野心が酔うていす 大阪市 若本多久志
 検札へ知つてゐることを聞いてみる 同
 まだミスでと恩師の声が低うなり 岡山県 梶尾 節子
 戦果あげた新聞が出た大掃除 同
 職場の子ウインクすればブンこなり 高知市 小松 茂春
 恋人が出來て灰皿まできれい 同
 フイアンセ此の一年の永い事 滋賀県 土守トシ坊
 負けながら白は渡さぬ椅子の徳 同
 不機嫌はふと前歴にふれてから 大阪市 安井比佐志
 引退の羽黒子供に負けてやり 同
 歳を訊くだけで銚子が空になり 貝塚市 福島 丁坊
 本妻は疎開の儘に置いとかれ 同
 貨幣價值千円札が尻ポケット 大和 岩垣日本村
 思い余つてもお化粧をして家出 高田市 同
 再軍備今に屑鉄値が出そう 宮崎市 野口卯之助
 パーマぐらいかけたらとらとる里の母 同

はつきり名を覚えませんがと続い
 てこうつけ答えた。「あの入習字
 の先生です団体がよくくるでしよ
 う。そんな時どこの宿屋さんもあ
 の人にその看板を書いて貰います
 の、そして入口へかけるんです
 わ」私は嗤つた。今の今迄大事に
 抱いていた夢が忽然ふつとんで全
 身が急に重だるく感じ出された。
 力の無い足どりで浴室へおりのた
 はそれから間もないことである。
 隣室の人がもう前にきて浸つてい
 る。人品卑しからずだ。「こゝの
 信大は文理大だそうですな」と湯
 槽の中で話の緒をきつた。「いや
 医学部が中心でそれが又盛んなん
 ですよ。そこへ工科、農科をおき
 ましてね」さきの紳士の話とは違
 つてどうやら詳し相だ。「あなた
 はどちらからですか」「え、東
 京ですが一年に一度はきまつて
 こゝへやつて來るんです。朝が早
 いのでいつもこうして少し寝てか
 ら迷惑のかゝらぬ様に出かけるん
 ですが」今どき稀にみる良吏かな
 と「文部省からでも査察にいらつ
 しゃつたんですか」と問を投げ
 ける。「いや私は商人でして」と相
 手は湯に浸けたタオルを徐ろに顔
 に押しあてた。一瞬私は彼を直見
 した。話のつぎ穂に何の商売か位
 は聞くのもよかつたかも知れぬが
 それさえがもう憶劫になつた。ま
 さに自ら求めて興味索然となつた
 訳である。裸は裸でもいつもの診
 察場ではないのでこのところ診察



孫抱いた重き嬉しく言いふらし 大阪市 永田都詩子
 肩書もない氣樂さを東・西 同 同
 もうすこし生きたい命ゴルフする 下関市 浜野みつる
 待ち呆けとは知らず口紅を濃く 同 同
 両親ご意見が合わぬベレー帽 兵庫縣 吉原 紅月
 箱入りに育つて菊の花が好き 同 同
 不作法を叱る手元で秋刀魚焦げ 出雲市 久家代仕男
 榮養がどうのと蝗串に刺し 同 同
 柿一つ赤い嵐のあとの空 岡山市 宗高ハツ茶
 風呂帰らしい立読みまだ去なす 同 同
 子を思ふ母には欲しいものがなし 岡山縣 國富 直人
 欠配がまたありそうな米の出来 同 同
 云い過ぎたついでだ僕の事も云う 尾道市 渡辺 逸
 云い過ぎた事迄母はほめるよう 同 同
 栗飯へ子供のナイフまでも借り 岡山縣 戸川 千流
 急用へ羽織の紐が見当らず 同 同
 怖れたと見た押賣りは猛り立ち 高知市 岡本 元馬
 貴婦人という鼻が立派な冷やかさ 同 同
 団体へ一番安い部屋を貸し 岡山縣 大塚美能留
 たよる子であつたあの子の墓参り 同 同
 死にますと云ふ落書へ母あわて 岡山縣 浜野 奇童

運動会にて

先生は兒の声援の中を行く 同 同
 色街に育ち十九のお母さん 大阪市 谷 一平
 女房より子供を叱るむつかしさ 同 同
 道草をせねばよかつた雨に合い 岡山縣 春名 秋芳
 双方へ味方が出来ず眼鏡ふき 同 同
 見舞くる人なく窓へトンボ飛び 神戸市 岩田 一夜
 再縁を断る膝で子が眠り 同 同

子と二人賽銭箱を覗いて見 出雲市 坂本竹ん馬
 貧乏の疊へ客が手をついた 同 同
 妻と娘が反對河豚を諦める 出雲市 原 章坊
 子をあやす術もやつぱり女の子 同 同
 善人の思案ばかりで年が暮れ 愛媛縣 島井 川鳥
 下戸の客だしに三本目が通り 同 同
 先生の植えた糸瓜が伸びて秋 愛媛縣 横田 一山
 寄り添えば妻子ある身と云ふかたき 同 同
 かけにくい後卸に横卸 貝塚市 高崎 雄声
 ノーハット帽子屋とノーハット 同 同
 三軍を叱咤したのが倉庫番 岡山縣 岡田 青果
 愛の巢と知らず台風まともに來 同 同
 夫婦愛愛は無限の線となり 小松市 上野 錦水
 秋晴れのア・パートソプラノも流れてる 同 同
 詰將棋うつかり出した懐手 津山市 三木 香平
 円満にやれと仲人少し妬げ 同 同
 月が出て二人の影の長いこと 倉敷市 岡野風の子
 女將もう財布を見ねば飲まさない 同 同
 不倖虫まで泣いて悲しませ 赤穂市 川西 去水
 旧家とは貧乏したと云わんでも 同 同
 パチンコへ余りと云へば袈裟衣 大阪市 本多 省三
 店番を娘にさせて富士も賣れ 同 同
 故里は紅葉の錦手紙書く 大阪市 横田 方眼
 老人の日なり散髪しておいで 同 同
 四五年で隠退する氣の家を建て 岡山縣 池田 古心
 端境を知らぬ銀座の灯で生活し 同 同
 事こゝに至りストとは勝手すぎ 出雲市 山本 晴路
 賜暇とつた甲斐ある鐘が三ツ鳴り 同 同
 赤い羽根強引のがついて來る 大阪市 兒島與呂志

も全くマイナス続きである。
 明鏡はほんに映つたまゝを
 みせ 湧三
 (筆者 大阪警察病院長)

句集「旅人」
 刊行に寄せて

八木摩太郎

昭和六年三月、桜咲き誇るころ
 私は私の拙き歌集「環境」を出版
 した事がある。

川柳家の路郎先生が、私の懇望
 を入れて、親しく歌集に序文を書
 いて下さつた。其の序文の一節に
 「八木君、同じ時代に生き、同じ
 空気を呼吸していながら、四角
 な机を四角な机とのみ思い、日
 夜計數のために頼りあはされて
 いる人々と、四角な机を象牙の塔と
 観じて虹の如き夢を夢みつつあ
 る人々と、何れが人生幸福であ
 るべきかは云うまでもないこと
 と僕は思つている。と云つたと
 ころで僕は現実生活者を侮蔑し
 彼等を所謂俗人扱いにして
 いるのでは決してない。それは君が

美顔水
 美谷園天製



主人留守チャルメラの音の淋し過ぎ
 看護婦の氣立がわかるベッドバス 貝塚市 小島さざす
 酔っぱらいへ娘不潔なように逃げ 同
 鏡曰くもうオッサンの歳だつせ 大阪市 金井 申郎
 蝶よ花よの顔色がちと青い 同
 淋しさをこらえて虫の声と寝る 大阪市 坂東千代美
 愛人がホテルを出るを見て
 もう誰も信じたくなし瞳を閉ぢる 同
 勇士たる誇パン／＼近寄せず 大阪市 西宮花山灰
 共稼ぎ次は別府へ行くと言ふ 同
 紙幣價值子供はちやんど知てる居り 島根県 石飛 水煙
 ラジオ止めて何か思案の十二月 同
 誰が喰うとも考えず稻を刈る 鳥取県 亀崎 漫歩
 隣席は美人だバスと揺れて宜し 同
 人の氣も知らずどん／＼禿げてゐる 愛媛県 高木 文化
 押賣りへ茶碗を置いて父が立ち 同
 金蓄める趣味とは恐れ入りました 愛媛県 日野青柳子
 仮名だけの子の作文をもてあまし 同
 強情なところも好きと腹立てず 和歌山県清水 初生
 養子かと思われる程に良く仕え 同
 二枚目の人氣は顔のホクロにも 和歌山県那須虎兒郎
 追憶にいつしか雨はやんでおり 同
 あいの兒に触れず床屋の世辞のき 和歌山県久保田青竹
 慰勞会上座ばかりに妓寄り 同
 那智の滝脊負つて一枚撮つて去に 和歌山県貝岐 瀑子
 自轉車で自動車事故を見て通り 同
 手相見が言つたと亭主疑われ 岡山県 森川 東南
 平手打させて頬から蚊が逃げる 同
 劍士美女派手に胡坐を組んで見せ 佐賀県 南川 光男

入門書読んで疑問を抱きはじめ 同
 浜に行くだけの氣晴し淋しすぎ 和歌山県松本 竹外
 茸狩りの今年も話だけになり 岡山県佐々部満佐志
 幼稚園僕を案山子のように書き 和歌山県楠本 柳生
 日めくりがめくれる様に癒りたい 和歌山県岩崎 君代
 雨よふれ彼女は傘をもつてない 新潟県 高野不二郎
 肉体美で無くて幸い病む身には 貝塚市 谷口 流水
 ガールフレンド此の子も父に似てまゝ 和歌山県谷口喜久治
 口癖に貧乏を云ふ妻になり 岡山県 穂北ベン郎
 時代相が禿げさせたように頭なげ 鳥取市 岩田天保錢
 飲んで来ちやイヤ云ふ妓が飲めぬ 大阪市 正口 辰始
 熱の子へ虫籠抱いた見舞客 和歌山県深田やよい
 腹立てた時の鏡は凄くなり 和歌山県今井那智黒
 遠慮なく折れど小菊を別に植え 大和 横田 紅涙
 芳沢大使結婚
 老境の我れ共鳴は限りなし 出雲市 森山 莊
 面会日雨の中でも父母は来る 和歌山県田中無津美
 ございますで俄に変わる初対面 石川県 桑山 ことよ
 満員車女の方が席を取り堺市 辻 圭水
 失恋しなさい人間が深くなる 和歌山県堺本 修司
 亡き母の想いを秋の花にこめ 大阪市 宝 平三郎
 押賣りへ姑を呼ぶ新世帯 和歌山県植田てる子
 ライオンが血を吐くなり娘の姿 岡山県 亀井 星浦
 住職は裏の鶏舎の中に居り 和歌山県岸本 木魚
 男の子ありますと云う障子なり 岡山県 南部ひでを
 一尺を動き歩行器騒がれる 大阪市 木村 十悟
 四天王寺にて
 年寄の目に六時堂変りなし 大阪市 安井 蜂呂
 どの課へもニツクネームで通るなり 大阪市 田辺 淳義

環境を詠い、僕が生活に即した川柳を詠んでいるのに親でも明かではなからうか。我等はただ二二三四の現実を直面して、ありのままなる二二三四として受け容れることの余りにも無味乾燥な人生であることを思うに過ぎないのである。

奈良の街々に響き渡る大仏の鐘が旅人の哀愁をそるものも畢竟するに鐘の形象そのものではなくて、鳴る鐘の音の余韻ではなからうか。歌を詠む人の歌、句を作る人の句は、その人自身の真実の姿であると共に又その人の余韻でなくてはならぬ。

この意味に於て人間としての尊さはよき実体がもつ余韻の翳々として尽きないのにあるのではあるまいか(以下略)とあるが今茲に、路郎先生の川柳生活五十年記念句集刊行せらるゝに際し、先生の川柳生活五十年の人生行路「旅人」は実に前掲の序文その儘の、先生の真実の姿であり、又先生の余韻翳々、奈良の大仏の鐘にも比すべき柳界への警鐘ではあるまいか。

愈々待望久しき先生の句集刊行せらるゝに際し、近く句集を愛誦し得る時に臨み、私は歌集を播いて先生の序文の一節を回顧し、その中に旅人の二字を見出して今更ながら愛誦し、その頃をなつかしむのである。

一路集

外交

橋本緑雨選

外交は厭だと言えぬ地位におり
 外交と気付きながらもうかき乗り
 外交の話のうまさだけを聞き
 外交はタクシに乗りバスに乗り
 外交の若さあべこべ教えられ
 博学へ外交員は負けて居ず
 七転びして外交で起つ気なり
 受取りの字も書き馴れて外務員
 後桶あつて外交腕が冴え
 調印するまで外交秘密なり
 もてなしを受けて外交言いもひれ
 やすく見た外交なか／＼骨が折れ
 外交員やたらに英語連発し
 外交員世間話は馴れたものとよ
 外交の秘訣後輩に教えられ
 外交員押の一手がよく稼ぎ
 押売の後で勧誘断られ
 外交の手腕愛嬢をも狙い
 外交のあの手でゆこうソツ酒
 外交に責任額がつきまとい
 外交にあふれ将棋を見て帰り
 外交員と云うわり気弱なこゝろあり
 外交官昔の夢を捨てきららず

和友 太路 卓風 牛一 同省 鼓風 高志 蘇堂 秋穂 辰始 甲馬 黒天子 直人 山雨楼 ペン郎 寛虚 荜花 日本村 丁坊 光男

外相答弁

外交へメモ一枚の席を立ち 摩天郎
 外交官希望は述べただけのこと 光男
 正直に云うて外交纏らず 水堂
 自惚れが外交辞令を真に受ける 十九平
 外交のついで私用も一寸足し 房子
 外交の腕が買われた廻り椅子 多久志
 外交がよかつたと云う声になり 悦子
 外交へ馬力をかける年度末 誠史
 佳・本筋にふれず外交今日は去に 京一樓
 佳・外交の虚々実々に草臥れる 十九平
 佳・外交は筋の通つた嘘も聞き 光郎
 佳・外交に結び軍備の要を説き 日満
 佳・恩給がある外交員願の敵 山雨楼
 佳・特だねを持つて外交は帰つて来 緑雨

故郷

古川魔花麗選

故郷へジャズ聞く学費とは言はず
 学転は第二の故郷が又も出来
 故郷に甘えて母の眠る墓地 摩天郎
 十年目帰る故郷へ標準語 誠史
 故郷にはただ墓だけがある男 同
 錦着て帰れば故郷の駅狭し 代仕男
 故郷の晩鐘昔のままに暮れ 同
 故郷の名物大阪にもあつた 一朗
 故郷の晩鐘昔のままに暮れ 同
 故郷の味をなつかしき 良坊
 秋茄子に故郷の味をなつかしき 良坊
 罪の子を抱いて故郷へ小さく着き 悦子
 もう一度故郷の虫を聞く不倅 実信

女房の故郷に頼る不仕合せ 水堂
 まつり寿司故郷の味をかみしめ 東岸子
 左遷とは知らず故郷は歓迎し 牛歩
 傷心の身を故郷は抱いてくれ 無松
 故郷を捨てた女が闇に立ち 春猿
 思い出を秘めて故郷はダムに消え 正郎
 故郷の煮味も変つた味で喰べ 望峰
 裏切つた罪を故郷寄せつけず 十悟
 故郷はそつぽを向いた赤い爪 同
 故郷へ帰り不思議な目で見られ 木魚
 故郷ではもう別荘もある噂 多久志
 黙秘権ボツツリ故郷を去つたやう 光郎
 P.A.A故郷も近いものとなり 芳花
 青春の夢は故郷を捨てさせる 鉄児
 故郷の記事は大きく目をとらへ 一平
 ふるさととは心の日記として残し 和友
 レーニン帽故郷の秋へ辿り着き 蘇堂
 故郷を呑んで静かなダムの水 芳仙
 故郷を語り度くない素性持ち 薰馨
 七色のペールの中にある故郷 志津
 故郷の記事を夕餉の膳にのせ 雄声
 故郷への想を捨てた労働歌 凡九郎
 出迎えもなき故郷の駅に降り 藤波
 逆境へ故郷の夢が綺麗すぎ 夢介
 竹桶へやつぱりうまい故郷の水 天信
 墓参して故郷の邸跡を見る 太路
 新妻と帰る故郷の明いこと 喜久治
 本名を故郷において灯に稼ぐ 甲馬
 故郷へ帰る夜汽車の遅いこと 海苔
 不覚にも故郷へよつて捕えられ 牛歩
 大阪と変らぬ音で故郷暮れ 日満
 檻の中人工故郷で気をもませ 辰治

川柳雑誌社特製
 投句用 柳 箋
 一冊(五〇枚綴)三〇円
 送料八円

品質優良
タチカワペン先
 TACHIKAWA PEN
 大阪市東区豊後町四八
 立川商事株式会社



タチカワペン先
 タチカワペン先
 タチカワペン先

スクーター故郷へ派手を風も切り 光男
 故郷では洋裁してことにする 一雨
 佳・中共で鍛え故郷に容れられず 十九平
 佳・故郷では指名手配が待つて居り 南天
 佳・故郷のよさも二、三日だけのもの 侃流洞
 佳・故郷の土産重たいものばかり 京一樓
 佳・何事もなかつた顔で帰郷する 悦子
 佳・秋刀魚とはこんなうまい故郷の贈 蘇堂
 佳・叱られに来た故郷のなつかしく 寛虚
 佳・ガード下皆んなそれれ故郷を持ち 春日
 佳・ふる郷の雪乗せて来るラッセル車 夜潮



人間横丁 (VII)

東野大八

十二月の辭

また十二月といういやな月がや
つてきた。私に限らず誰しもちろ
うが、家族をかゝえてなにかなし
の月給目当に生活をたてゝいるも
のは、この十二月という月ほどム
シの好かないものはない。金、金
金の毎日で、十圓の金といえど
も、この月ほどマネーオンリーの
スペクタクルを感じせしめられる
ときは他にない。

金持をケイベツするに金が
要り
という句を、二昔も前に作つたこ
とがあるが、今もこの感慨はい
さゝかも変らない。時にはわが家
に一枚の端した金もないときな
ど、その焦躁キモに徴して、何か
なし憤然と、世界中の金持を一人
残らず絞首台に送り、その家をベ
ロすけ火を放つて焼きすてしま
いたくなる。こんな不逞な妄想
に、このわが身を馳りたてる金と
いう奴、さてもさても金色の魔性
ではある。

片腕の暮しアカハタ送られて
という句を作つた終戦直後など、
本場にその黨員になつてやろうか
とさえ考えた。共産党の火焰びん
などは、さしずめこんな私のよう
な男が、憤りをこめて対象物に向
つて投げつけたものらしく思え
る。非合法は率直な怒りだ。
ところで、こんな暮しのたゞ中
で、尾羽打枯したわが身の惨しさ
に、關然と思ひ及ぶことは、敗戦
の歴史と現実ということだ。こん
なわれらに誰がした、その破滅の
第一歩を踏み出したのもこの十二
月だ。戦争と十二月、この因果な
までに激しい現実感、私の肉體
の滅びるまで、消え去ることはな
いだらう、そこで今日は、この十
二月八日からじまつた、ひとこ
ろの話について書いてみる。報道
人だつた私において、勿論その話
というのは言論抑圧だ。

集會がある。そのときニュースを
頂く。それはすべてタイプで打つ
たもので、あくまで原文尊重であ
る。「これじゃ全くわれわれは、
メツセンジャボーイじゃやないか」
とみんなはぶつさくいつたものだ
がその通りだつた。そのタイプの
原稿を書くのは、中学生のような
Hという少尉で、この男は某高校
卒の幹候上り、文章も何もあつた
ものでなく、まるでアルバジルの
効能書みたいなゴツゴツの悪文を
書いた。

「朝日、毎日の一流紙におれの
文章がそのまゝ出るんだぜ」とこ
の少尉が、某料亭で妓相手に鼻
高々の手前味噌を並べているのを
きいた某氏のKが「何をこのゴド
モが……」といつたばかりに、日
本人が十一人しかいない、最前線
の通信員にハジキ出されたことも
ある。発表文も掲載の日時が確定
されていく、一時間の遅延があつ
ても大変なことになる。酒に酔つ
たらつた私も予定稿をそのまゝ送
つて、危くクビになりかけたこと
もあつた。

昭和十六年のあの十二月八日、
宣戦のニュースを聴いたのは北京
だつた。ニュースの中心は北支軍
報道部だ。こゝの記者クラブは新
星という会名がつけられ、人会す
る記者は、戸籍謄本と思想関係が
調査された。毎日午後三時に定例
軍のH少尉と五十歩百歩だつた。
愚にもつかないしろものを長々と
書いたのを、全国の新聞に掲載さ
せ、いうことをきかない社は「非
協力」「赤」だとのハンコを押し
ていじめる。当時新聞屋仲間では
この彼のことを「インボデン天
皇」といつた。わけのわからない
のはこの仁だけでなく、東京で聴
いた昔の仲間の話によると、中央
の米軍本部での検閲もH少尉の同
類がいたそうだ。

この占領軍の検閲関係の長はマ
ロイ中尉といつた、学徒動員で兵
籍に入つた二十四、五の男で大学
も出ていず新聞の経験などは皆
無、それだけでもヤマがみえてい
るのに、彼至つて小心でまことに
官僚的、一寸やこしいものにな
ると、いちいち関係機関に問合せ
たり相談するので、やけに時間が
かかる。当時東京の各紙は、彼の
もとへデラ刷を提出して、検閲を
うけスタンプを捺して貰わないと
印刷にかゝれなかつた。この人日
本語が判れば世話がないのだが、
いちいちそれを二世連中がホン訳
して眼を通させる、だから英訳の
仕方でもツツになつたり、通つたり
する。二世連中が立派だといふん
だが、なかに人の良くないのや頭
の悪いのがいたからまことに厄
介。漢字制限や新かなづかいとい
うくだらんものが出たのも、この

連中の頭の問題から出たのじやな
いか、というよふな話がまことし
やかに流れたものだ。
とにかく検閲の対象となつたも
のは、米軍に不利なニュースや解
説で、これは日本側のみでなくア
メリカ側の特派員たちの記事にも
適用された。マ元師の軍政批判を
手厳しく書いた一人は帰国命令が
出され、日本への政治干渉をとり
上げた他の一人は、好しからざる
人物として以後の取材を拒否され
たりしている。デモクラシーの国
アメリカとか、自由の国米国とか
いつたものは、無条件でパスした
こと勿論で、私たちは軍の権力ど
いうものが、日本、米国に限らず
何処でも一律にこの始末と知つて
興味深く思つた。要するに地球の
表面のどこかに「戦勝国」という
ものが存在する以上、言論の自由
はあり得ない、ということにな
る。よし戦勝国というものが無く
なつても、一つの強力な権力のあ
るところ、必ず言論は不自由を感
じるということ。これは地球が滅
ぶまで変ることはあるまい。

金のない十二月ということか
ら、話はえらく飛躍したが、以上
の言論の問題も戦争の事実も、詮
じつめれば金である。
こんな愚にもつかないことを書
いた私自身にも金がない、という
ことからこれが出てくるのだが、
いかゞでございます皆さま。

調査された。毎日午後三時に定例
星という会名がつけられ、人会す
る記者は、戸籍謄本と思想関係が
調査された。毎日午後三時に定例



川柳の歴史落穂

福田山雨楼編

本稿は本誌二十七年六月号六月の巻から始め前号即ち十一月号五月の巻で終了したのであるが、既述の外に洩れた事項が少くないのでここに取纏めて追記することとした。尤もこれらのものはその事柄の起きた年次はわかっても月がわからぬため、これまで何月の巻とした手前掲げ得なかつたものでここに録して大方のご教示を仰ぎたいと思う。この外にも脱漏した事柄或は誤りが少くないと思われるが併せてご教示を願いたい。なお本稿は頭初に述べたように明治以前のものと、終戦後のものは除外した。前者については江戸時代の歴史は年号はわかっても月のわからぬものが多いからであり、後者は歴史と云うには余りに年数を経ていないからである。それから文中敬称を略したことを不慮ご諒願いたい。

主要圖書の出版

明治五年「柳風狂句家内喜樽」。同六年小信画「新選川柳点絵草紙」大阪版。同九年十方舎「丸画」宮島新柳樽。同十二年小林磯英画「狂歌川柳名善寄合」武井佐吉版。同十三年「教句川柳投書樽」大阪版。浜野千藏著「開化新

樽」が内外出版会から。同四十三「俳風柳多留」が横浜川柳社内柳多留懇話会から。「俳風柳樽一集二集」が集文館から。浅井林之助著「白日（青明五葉の句）」。大正元年蜻蛉庵著「川柳一万句集」水鳥附録。同六年「局待川柳全国大会句集」が川柳やよい会から。同七年矢野きん坊著「川柳の作り方」が忠文堂から。「玉木龜堂追悼句集」が月都会から。同十年飯島花月著「川柳六文銭」が同氏から。秋の屋著「評釈川柳妙句選」が町田書店から。同十四年風窓湖十著「眉斧目録」が川柳寺雀羅から。砂山岳紅著「柳の葉末」が同氏から。同十五年柳訂著「川柳手ほどき」。岡田朝太郎著「寛政改革と柳樽の改版上下二冊」。「川柳書目」一篇より三篇」が古川柳叢書発行所から。昭和二年「句集砂」が遠藤砂の家から。佐藤紅霞著「川柳変態性慾志」が坂本書店から。同四年藤村作者「絵入柳樽」が富山房から。同五年「あさ

黄柳多留四輪編講」が川柳浅黄社から。同六年「近世日本文学大系川柳狂歌集」が柳書刊行会から。同七年「九樽道人方壺敬人共著「末摘花通釈」が曲肱書屋から。同八年キング文庫「川柳漫画」が講談社から。和田天民子著「現代川柳名句選」。篠原春雨著「あしの影」。斎藤松窓著「松窓句集」が川柳叢書刊行会から。岡田三面子著「俳句講座特殊研究編川柳と俳句」が改造社から。同九年麻生路郎著「漫画と川柳」が富永興文堂から。同十年平野茶山著「川柳名句選集」が宏元社から。花岡百樹著「江戸川柳名句選」。河柳雨吉著「句集柳風雨調」がおもいで吟社から。同十五年宮尾しげを編「昭和川柳百人一句三篇」が同刊行会から。古川風竹著「川柳忠臣蔵」が自由時事社から。同十八年川上三太郎著「川柳と作句鑑賞」。同十九年鈴木重雅著「俳句川柳新選」が武蔵野書院から何れも出版。

主要柳誌の興廢

明治三十八年東京から「万覚帳」。秋思、あい子、溪華らによつて「はごろも」。同三十九年東京から「同好」。同四十年神戸から「現代川柳」。神奈川から「蕾」。同四十一年東京から「綾志野」。入幡から「洞海」。同四十二年松山から「矢車」。岐阜から赤ン坊、蛙骨、案山子らによつて「青柳」。米子川柳社から「華」。同四十二年目角子、藤吉郎らによつて「響」。入幡から「パーセント」。(翌年鳩となる)。八王子から「我楽多草誌」。横浜から「明和」。同四十四年東京から「徹」。横浜から「比佐古」。同四十五年横須賀から「みなと」。大正元年東京から「川柳文学」。鳥取から「華」。東京から「カンシヤク玉」。同二年東京から「狂狂」。横浜から「春雨」。札幌から「仔熊」。徳島から「かへで」。東京から「糸」。同三年東京から「翡翠」。「毛槍」。岐阜から「とんぼ」。愛媛から「やなぎ」。同四年東京から「さくらんぼ」。同五年東京から「川柳」。松山から「五色」。大連から「紅柳」(渾から川柳幼稚園となり更に改題したもの)。同六年福岡から笑字坊らによつて「イタツラ」。東京から「恋唄」。京都から「京都文芸」。「紅龍」。札幌から「わがまま」。「アツシ」。福島から「独活」。香川から「川柳」。石川から光淋坊、らみ三らによつて「青竜刀」(四号まで出る)。同七年東京から「黒髪」同八年青森から「みちのく」。香川から「猫車」。同九年東京から「灰神楽」。同十年東京から「川柳村」。川柳誌甲府から「さんにも」大連から

泊4日の船旅 三三の日のホッキリで 別府温泉へ

船中二泊八飯館一日三食付
其の他費用一切のおお申込は

関西汽船

「化柳」。山口高校内四迷子、文坊らによつて「やまたかし」。同十一年島根から「煩杖」。金沢から冬青個人誌「そよご」。同十二年東京から三太郎、きん坊によつて「二つの目」。石川から「むなぎ」。辰巳。山口から「壇の浦」。同十三年松江から「陽炎」。「紫陽花」。以上何れも創刊。同年右大臣、短紅冊らによつて仁川柳社創立。同十四年大阪から「宇起城」。「鯛茶」。島根から「なぎさ」。金沢から「川べり」。(十五年十二月迄に四回発行)。広島から「影像」(千里十里を改題す)。同十五年天津から「蒙古風」。東京から「不忍」。福島から狂水らによつて「あけぼの」。徳島から「草餅」。昭和三年広島から「浮舟」。愛知から「美香」(文辭の後波止場と合流)。山口から「佐加太利」。東京から朝太郎、新輝らによつて「むさしの」。名古屋から千鳳、笑山らによつて「紫」。豊橋から梅里らによつて「大豊橋」。同四年東京から草詩堂一派によつて「行詩」。函館から「ひぐま」。同五年東京から餡ン坊中心の「有鱗」。茶六らによつて「すずめ」。犬山から有町らによつて「すげ笠」。古刀らによつて「蛇皮線」。以上何れも創刊。同年青森に北柳吟社創立。同六年高知から濁水らによつて「帆船」。松山か麦舟らによつて「ひ

かぶら」。同七年東京から「柿」。同八年東京から「おもいで」。京都から「京都西陣」。島根から「川柳雲」。大阪から「このみ」。同十年東京から「〇九帳」。「川柳界」。横浜から裕侍、葩夕らによつて「知古」。以上何れも創刊。同十五年大阪の三味線草は「川柳春秋」と改題、翌十六年には「関西川柳学会々報」と改題、更に十九年には「日本川柳学会々報」と改題す。同二十年京城から「報国川柳」創刊。著名川柳人の他界 大正五年から九年の間に弁天子、掬知庵(何れも柳樽寺派)逝く。同七年東京剣門の青藤正次逝く、独逸文学に造詣の深かつた人。同十二年山陰の香宿米子の村穂珍馬逝く。同年波布会主宰甲府の柳沢江紫逝く。同十五年山形の白旗浩蕩(東北川柳同人)逝く。昭和三年京城の逢吟家述金五郎逝く。同四年頃ひさご、常坊何れも逝く。同五年尼崎の大久保三郎、西柳樽寺派の新屋仏東子何れも逝く。同七年祇梵(大阪)三十六才で逝く。同年披講振で有名な神戸の万豆逝く。同年豊橋の火石思考、大原南亞何れも逝く。同八年朝鮮咸興川柳会の泉伊行逝く。同九年神戸の芦田木花は武田尾で看護婦と心中。同年神戸の山本林鹿、島根の井原鴉夫(二十八才)何れも逝く。同十年東京の瀬川京

太郎、田中白梅(天馬吟社同人)、福岡の山田霸王樹(川柳人誌系二十三才)、静岡の渡辺三四四(遺句集出る)、大連の後藤玉江(二十七才)何れも逝く。同十一年大阪の武二呂、東京の明石栄一、空積の大業八楼(遺句集出る)、広島岡本春陽、大連の立川四馬翁(大連柳壇の先覚者)何れも逝く。同十二年島根の澄田羅門(二十四才)は山西省で戦死、佐賀の高口一男、松江の古割砂詩郎何れも戦死、東京の門井史郎(三越川柳会)、大連の高橋しげ子(遺句集出る)何れも逝く。同十三年東京の箱守系柳は中支で戦死、長野の横川曲豊も戦死、東京の内田馬寿坊、物井風柳(三越川柳会同人)、柴田番夫何れも逝く。同十四年松江の吾郷夢迷戦死。同十五年八王寺の村田柳路逝く(遺句集出る)。戦時中岡山の龜山宝年坊逝き、きやり社同人森印象、橋本院司何れも戦死、角本薛郎戦死。同十九年樺太の宮沢笑将(きやり社人)ボルネオで戦死。同二十年東京の今井九曜亭、秋山占桐(何れもきやり社人)何れも沖繩で戦死、東京の馬場あや子(川柳研究社同人)は父母と共に戦死す。

大正五年から九年の間に弁天子、掬知庵(何れも柳樽寺派)逝く。同七年東京剣門の青藤正次逝く、独逸文学に造詣の深かつた人。同十二年山陰の香宿米子の村穂珍馬逝く。同年波布会主宰甲府の柳沢江紫逝く。同十五年山形の白旗浩蕩(東北川柳同人)逝く。昭和三年京城の逢吟家述金五郎逝く。同四年頃ひさご、常坊何れも逝く。同五年尼崎の大久保三郎、西柳樽寺派の新屋仏東子何れも逝く。同七年祇梵(大阪)三十六才で逝く。同年披講振で有名な神戸の万豆逝く。同年豊橋の火石思考、大原南亞何れも逝く。同八年朝鮮咸興川柳会の泉伊行逝く。同九年神戸の芦田木花は武田尾で看護婦と心中。同年神戸の山本林鹿、島根の井原鴉夫(二十八才)何れも逝く。同十年東京の瀬川京太郎、田中白梅(天馬吟社同人)、福岡の山田霸王樹(川柳人誌系二十三才)、静岡の渡辺三四四(遺句集出る)、大連の後藤玉江(二十七才)何れも逝く。同十一年大阪の武二呂、東京の明石栄一、空積の大業八楼(遺句集出る)、広島岡本春陽、大連の立川四馬翁(大連柳壇の先覚者)何れも逝く。同十二年島根の澄田羅門(二十四才)は山西省で戦死、佐賀の高口一男、松江の古割砂詩郎何れも戦死、東京の門井史郎(三越川柳会)、大連の高橋しげ子(遺句集出る)何れも逝く。同十三年東京の箱守系柳は中支で戦死、長野の横川曲豊も戦死、東京の内田馬寿坊、物井風柳(三越川柳会同人)、柴田番夫何れも逝く。同十四年松江の吾郷夢迷戦死。同十五年八王寺の村田柳路逝く(遺句集出る)。戦時中岡山の龜山宝年坊逝き、きやり社同人森印象、橋本院司何れも戦死、角本薛郎戦死。同十九年樺太の宮沢笑将(きやり社人)ボルネオで戦死。同二十年東京の今井九曜亭、秋山占桐(何れもきやり社人)何れも沖繩で戦死、東京の馬場あや子(川柳研究社同人)は父母と共に戦死す。

麻生路郎選評 村川源之助装幀

山陽川柳

一八九九人作家集 総句数二二四七句

A5版 二二七頁
定価 二〇〇円
二四四円

山陽圖書 出版
K K

発行所 大正市住吉區内方西五丁目二五
観音山 大阪 七五〇五〇

取次御注文は 川柳雜誌社

最新刊

「新開」 戦つてる戦つてると新聞見せにくる 大阪 佃 嶺月

「油断」 屋台店一人油断の出来ぬ客 大阪 高橋 啞醉

市長賞 「たばこ」 良い裁きして心澄むたばこ 大阪 岡田絃一郎

「出前」 花札をちらりと出前見て帰り 大和高田 博多 成光

「味」 あと味のよきこれしきの銭が生き 大阪 木幡 村雲

「ピカ一」 ピカ一の足とも知らず狭む壁 兵庫 西川 安静

「労働者」 一生を働きぬいた手の太さ 大阪 谷 白亭

「期待」 期待する吾が子だん／＼吾に似て 大阪 青木 三碧

「子」 ネクタイを解き／＼覗く子の寝顔 大阪 松江 梅里

BK川柳の会の放送日時変更

BKの聴取者文芸趣味のしお



投稿規定
用紙は原稿用紙
文字は正
確
開催月日及場所記入
締切毎月二〇日
投稿先本社宛

本社十月句会 (大阪市)

十月三日 於 光明寺

颯風十三号一過後の柔しい、秋の夜
集いとて、作句熱旺盛な人々は、定刻前
から詰めかける熱心さ。鮎美氏の句評は
十月号各地柳壇から、とよ、快夢起、芳
扇、杏花の諸氏の句を挙げて短評を加え
られた。路郎師の柳話は川柳の特殊性、
特殊心理を発見して句を一步一歩生かす
こと、並に戦時中の時事吟二三句引例し
て話された。後、席題、兼題の披露に入
り、不朽洞賞優勝カップは真鍋一瓢氏
(本年三回目)が把握された。閉会九時

(摩)

出席者 路郎・古方・へとち・清潮・勝
己・春斉・旅風・ひろし・水堂・水客・
杏花・淡舟・潮花・塗杖・少将・紫香・
しげお・凡九郎・圭水・一瓢・省三・狸
仙・玲人・辰始・一平・一十・与呂志
牛歩・都詩子・嘉一・梨花・香林・金八
郎・葉光・雅葉・白鳳・秋窓・一三夫・
雅葉太・扇子仙・和歌水・三司・帆加夫
胡蝶・鮎美・水茶・春菜・小松園・高志
和友・義英・摩太郎・天貧・乱酔・恒明
貴山・文蝶・栗・霞乃・梨里

兼題「肩書」 麻生路郎選

肩書をつかぬ名刺も社長持ち 多久志
不良少年父の肩書邪魔になり 千流
片仮名ばかりの肩書にちぢ押し 一十
肩書に屎尿相談役とあり 与呂志
肩書をPTAは見のがさず 一平
肩書にものを云わせて押し強し 香林
肩書へ村長以下が出迎える 京一樓
肩書の程度受付知つて居る 紫香
責任のある肩書で情を捨て 水堂
停年を見逃さず私大買ひに来る へとち
肩書へ女将少々不安がり 京一樓
肩書はないが首相の子で知られ 扇子仙
肩書を見てからサービスしてくら 天貧
ちよつとした義理の花環に前県議 三司
肩書に惚れて妓にある虚栄 七面山
肩書はインチギだつた貸し倒れ 杏花
清潔な名刺肩書何ものなし 一十
肩書が取れた身軽さ梅を干す 三司
肩書の割に小さな家に住み 雅葉
仏様にまで肩書をつけたがり 水堂
肩書があつてつき合損ばかり 季贊
肩書をフフンとはじきほつとかれ 貴山
肩書がマ、にも付いたPTA 雅葉
肩書も嫌ぎ一鶴たらんとし 一瓢
肩書へどえらい金を投げ出して 秋花
肩書へ我が生涯を摺りへらし 潮花
肩書がある間と飛ばすパンフィツク 一瓢
禿けて、も肩書へ妓手をつかえ 路郎

兼題「家風」 戸田古万選

子三人目には家風も変つてゐ 塗杖
僕の恋家風こちや、蝕れて来る 和歌水

右向けば右で家風に向く養子 京二樓

株式になつて家風を少しかえ 勝己
来て見ればこゝにも同じ家風あり 嘉一
家元の家に生れて秋の足袋 水客
茅屋に家風偲ぼす花を添え 凡九郎
間貸にも家風に合うた人を擲り 帆加夫
情熱の恋家風に合はぬのが承知 同
色街に来ても家風をほめめかし 雅葉
癖の顔丸く家風に逆らわす しげお
先代の硯の上の螢光燈 水客
二人目の養子家風に逆らわす 多久志
ヒステリックな声で家風のお説教 帆加夫
家風など云つてられない子沢山 圭水
就職へ家風の良さが先づ買われ 雅葉太
おてんばは家風と別に育つて来 しげお
押し付け家風へ下女も足袋をはき 一瓢
家風とは別に金持喧嘩せず 扇子仙
長女次女三女となれば家風など 小松園
本家には家風に合つた嫁が来る 季贊
猫入れて三人住いにある家風 島浦
伝統の家風で祝ふお元日 香林
正月のほかは家風を母言わず 三司
まゝごとも家風が合わず遂に採め 梨花
幸せな家風の中でお茶を立て 和歌水
だん／＼と養子家風の上よ染み しげお
はたきの音も家風に合っている 春葉
家風やろかちつちやい迷信 古方

兼題「青年」 富岡淡舟選

青年の振る手も派手な別れよう 三司
野心満々だけで過ごした青年期 少将
青年の尻の青さを見透かされ 一平
青年の隙に世の中が汚れすぎ 少将
青年に相植うてはつけあがり 水堂

青年は思い切り良く故郷を捨て 七面山

あつさりと青年社長破産する 一三夫
青年へ理解の父は故郷に居り 清潮
青年のどこか茶目気が抜けきらず 少将
胸いぬまゝ青年に夢多し 杏花
新聞に載る青年の恐ろしさ 葉光
青年の若さへ恋をゆずつとき 七面山
青年の夢に逆らう夜が続き 小松園
真理求める青年の瞳がきれい 金八郎
青年へ海の広さが眼にしみる 紫香
青年へ母の話はくどすぎる 春葉
青年の汗美しく土に落ち 水客
青年の秘書で暮して蒼白ろし 鮎美
青年の熱意左にそれたがり 水堂
天地静寂青年へ物足らず しげお
憐れみを拒み青年自己に生き 秋窓
青年の自嘲坐禅の灯に生きる 鮎美
母の手を引いて青年振向かれ 春葉
青年に明治の気概見当らず 淡舟

席題「奇蹟」 菊沢小松園選

奇蹟信ず心の弱さへ鞭を当て 旅風
両親が泣いてよろこぶ子の奇蹟 春葉
奇蹟待つベツト看護の瞳がうる 少将
奇蹟をば信じたくなる暮し向き 水客
父ちゃんの奇蹟こげずに釜の飯 嘉一
奇蹟でしたと病院からもどり 雅葉
カンプルへ奇蹟をうる社職がうる 和歌水
宝くじ奇蹟信じた人が買ひ 一三夫
起らない奇蹟へ腕を組んだまゝ 胡蝶
本妻も二号も奇蹟手を握り 鮎美
結局は奇蹟をたよる氣の上より 凡九郎
奇蹟のみ信じ切つて居る瞳がきれい 都詩子
奇蹟聴く信者へマイク故障する 旅風

次の間は奇蹟信じる声になり
血だらけのまよふ奇蹟の生きている手
最後まで奇蹟信じた仏さま
水客 紫香 小松園

席題「生涯」 正本水客選

アドバルンの様な生涯かと思た
指切りをして生涯をちかいいい
生涯を懸けるに惜しいとは他人
華やかな生涯だけが記事になり
生涯の花に雨風はげしき夜
これからという生涯を病んで
生涯をけち／＼暮すだけとなり
性格が生涯経理から出さず
生涯をきれいに送り悔むこと
紙くずの様な生涯はつとかれ
生涯をじみに暮して花を植え
踏切番という生涯を生き抜いた
生涯の不作の縁に養われ
孫の手にわが生涯のつながらる日
生涯へまたけつまつきけつまつき
生涯をとらえてフツとはにかんた
渡し守生涯という水を見る
生涯にふれず二号として困い
生涯のことは言わない日記帳
生涯を思い続けた美しさ
水客 清潮 潮花 葉光 紫香 鮎美 勝己 恒明 牛歩 狸仙 金八郎 古方 省三 和友 しげお 胡蝶 貴山 胡蝶 和友 水客

席題「物好き」 友淵貴山選

物好きは裏道ばかり歩いて来
消防が去ぬまで火事を見物し
物好きが高圧線にふれかゝり
物好きは猫のおんべに紋をつけ
物好きは虎とライオン夫婦にし
物好きに聞けば此頃天理教
物好きが台風の写真撮つて来る
紫香 水堂 ひろし 小松園 一三夫 淡舟 杏花

物好きがテレビの中を覗きこみ
物好きな奴男娼について行き
ストリップ観に物好きのカブリつき
物好きな別れさす後買うて出る
自腹まで切つて物好き舞うてるせ
物好きは浮浪児許り雇つて見
物好きにお猿を飼えば噛み付かれ
物好きのこんな雨の中を行く
ほと／＼聞き聞き／＼汽車に乗り
物好きにでしやばり／＼引受る
物好きの家へ生れた出臍の子
特許からもう物好きとは許さず
物好きがすぐにこわれる物を買
物好きな愛を信じる東ね髪
物好きの生きて乗りたい霊板車
ほどがある物好き箸を溜めて
物好きを一人加えて寄附に出る
ほどき物が好き秋晴を閉ぢり
淡舟 扇子仙 文蝶 恒明 同 雅楽太 へとち 三司 水客 清潮 飄 秋窓 潮花 葉光 ひろし 扇子仙 牛歩 水客

川梅田支部句会(大阪市)
十月十二日 於 阪神ビル

水谷鮎美報

水汲みの家から見える誘蛾燈
秋雨もしばしネオンに吸いさられ
秋の灯にただなんとなく廻り道
秋の灯へ母もシヨパンがわりかけ
秋の灯へ酒は静かに飲むべかり
お見舞が身上話ばかりする
釣れ出して沖のヨツトが忘れられ
秋の灯へ影長々と待ち呆け
おでこの蚊たよけば秋がきて音
秋の灯に坐り琴爪もてあそび
秋の灯へ妻編み急ぐ子沢山
杜的 悦朗 彌平 杏花 三司 春夢草 ゆづる 凡九郎 水客 潮花 一夜

声だけで秋の灯影に道を聞き
九階建ずらりと秋の灯がつゝみ
秋の灯の対談虫の声も入れ
へちまの風に燈台の灯がうごき
でぼちんの櫓を睡きでなせられる
でぼちんの子が叮嚀にお辭儀をし
気の弱い河童は蓑と笠をかり
ボス河童皿に水苔などはやし
皿の大きい方が美人の河童なり
子を連れた河童は岸へ近よらず
注告をするにはもつてこいの髭
女ではあかんと父のこわい髭
無精髭をのまゝ見合してしま
いゝ話髭を忘れてついて行き
さかねちが恐さに寄附よりつか
さかねちを喰わす芸妓の白い
さかねちへ結局母の方が折れ
さかねちへ話まとめる酒をつぎ
身上話ただ両親がないだけのこ
紫香 おさむ 鮎美 水客 望峰 しげお 三司 古方 十四郎 杏花 山風楼 夢生 清潮 一飄 酔華 主三 杜的 白溪子 彦六

川日立櫻島支部句会(大阪市)
九月十八日 於 日立造船所

丸尾潮花報

可哀そうに仔猫を闇に捨て去
引越の荷物とともに小猫着き
叩かれる小猫は耳をかくした気
ゴムマリへ小猫必死の爪をたて
小猫とは言え物音へ背を丸め
こほろぎの不運小猫の目にま
うらなりも我家に大事なものや
うらなりは二癖三癖もある胡瓜
せがまれて買ふた西瓜も二番
うらなりが蛙へころんだま踏
夏やせが目だけ凄んで訪ねて来
秋花 秋花 鳩花 一 望峰 清潮 一飄 京花 吞水 倭文男 潮花 有泉

阪田騰写版

二五町田芝区北市阪大

会商田阪 株式

番一九九五 島福 話電 番四一三六

夏やせへ土用うなぎも効がなく
もとからの瘦へ夏やせ気にか
海岸は日傘水着で埋めつくし
特価品の日傘も交る行楽日
川維布 哇支部 ウイロー社句会(ハワイ)
古川麗花麗報
新婚の当座家計簿日記帳 快夢起
新婚は笑つて焦げた飯を喰べ 虹橋
新婚へもう悪友の歯がたたず 草一郎
新婚をからかはれる四十すぎ 麗花麗
新婚の旅照つてよし降つてよし 常夏
新婚の当座貴方が口に出す 迷
生涯が新婚の如く続くなら 芳雨
新婚の写真子供にひやかされ 拝山
新婚へ今日も保険屋根気よし 曉舟
新婚の夢が持ちたい共白髪 柳葉
新婚へ妬みをふくむ祝ひ品 紀南児
空の旅恐い同志のハネムーン 野涉
新婚へ長居する程野暮でなし 旋風
新婚のプラン如何と残しませう 峰雪
新婚の夢何日までの寿命もつ 泉水
新婚のドブミルクへ陽が高い さいみん
訪へば新婚写真真光つてる 煙波

新婚のなまめく笑みを黙殺し 笑有
ハネムーン背すり合も田舎風呂 修一郎

川 堺支部句会 (堺市)

十月八日 於 摩天郎居 八木摩天郎報

合オーバー置いて溜つぼ迄の道 左久良
合オーバー遊覽パスの埃を受け 貴山
合オーバーから競輪の札が出た 春翠
質藏の隅に出を待つ合オーバー 雄声
ランデブー今宵借着の合オーバー たかし
立説みの爪がのびてるなと思ひ 水客
立説みの通常でない記憶力 玲人
立説みに入ればお客が少なすぎ たかし
立説は懸賞だけを見て戻り 雄声
立説みがバサリ弁当がら落し 貴山
立説みへまた行先の違ふバス 夢遊
水枕うなずく顔にさからはず 水客
膝枕芸者あくびをかみ殺し 好郎
落ちぶれた夢ふろしき包枕にし 水客
大臣も恩義の人に辞が低くし 雄声
お隣といふ義理があり今日は貸す 夢遊
きつちりと香典だけはとどけられ 凡九郎
紹介の義理見積りだけはさせ 好郎
受取つた口止料に怖くなり 玲人
二三日して口止めの葉書がき 水客
口止めは指一本で用が足り 圭水
口止めの事で揉めてる四畳半 摩天郎

川 淀川支部句会 (大阪市)

十月八日 於 香林居 武部香林報

いつまでも一人でいじのこ一寸すね 敬二
子沢山一人位は肩も出来 水堂

一人をば取巻き愛のもつれゆき 礼三
煮豆屋で逢えよこの頃やもあす 香林
たつた一日一人ぼつちになりたくて 同
久し振りに会ふ我橋たそがれる 都詩子
久し振りに逢うた先妻取りすまし 柳蛙
乳母車泣くまでははずむ久し振り 水堂
スフを着て人造米の握りめし 若菜
生きのびて人造米にビルマ米 水堂
アイゴいのほかは知らぬ朝鮮語 天貧

川 備前支部句会 (岡山市)

九月十二日 於 久米雄居 浜田久米雄報

瓦など思いもよらぬ暮しです 半仙
初節句いらかの波に鯉がはね 浄美
瓦ぶきしてから密附の割がふえ 東岸子
瓦師のくろい煙がまたもうけ 久米雄
へびが出てそれをか挿入せおわたり 一糸
挿入れの中までのぞく里の母 みや子
物忘れ挿入れ遂に掃除する 苑女
挿入れの布団くらしの幅を見せ 正州
質縫いのミシンを止める虫が鳴き 娘句楽
ミシン踏み妻の家計は手落し 柳種
朝露をふんで胃病はかるくたべ 清風
これしきの事を祝うて好きな酒 柳風子
祝酒ほんとに酔うてくれと言ひ 浄美

第五回 西日本川柳大会

九月廿日 於 弓削小学校講堂

「疊」 路郎 選

あの男疊の上で死ねたとは 昭堂
吉日も近し疊へ落ち着けず 三林坊
懇々と疊へ説諭する如し ベン郎
御利益は知らねど長い石疊 雷山

敷きかえて疊冷たい色をもち 東南
二疊敷女不敵な取引し 野人
釈放は夢ぢやなかつた青疊 一山
疊まで出来て娘の出た噂 永笑
次男以下疊で角力とる元氣 登山
妾宅の方がお先に青だたみ 白柳子
一間きり替えた疊に妻若し 鳴子
疊屋をたのめば式の日を知られ 黄月
真実を求めてはじぬ古疊 松平
新築の疊木の香に負けて居ず 葉光
同えば疊の上で犬が吠え 夜潮
でこぼこの疊酒量がへつて居る 鮎美
疊敷迄税金に睨まれる 秋芳
疊屋の疊切れてる子沢山 菁紅
陽の当る疊へ寝た子引いてゆき 東岸子
すり切れた疊お客の子がいじり 一雨
青疊汚して欲しい子が欲しい 三葉
戦前の疊のまま飲んで居り 不老
滯納の家とは見えぬ青疊 一柳子
疊屋に嘘の言えないことがあり 藤波
青疊一さし舞ふて見たうなり 日満
上敷で我慢する氣の新世帯 照子
好敵手疊の焦げるのも知らず 枯葉
夫婦とは宿の疊も見ておらず 岳峰
設計図疊の部屋も一つ取り 直人
表には干せぬ疊で金を持ち 愛子
退院の素足疊が懐かしく 悦郎
疊悉ふ程になつて退院日 香平
大の字になれる疊のかび臭し 惠二朗
内職で作りし疊恩に被せ 昭三
平和なり疊破れて子が育ち 大平楽
衣食足り住が六疊一間きり 米花

よろこびは今宵疊で寝る話 那岐麓

引揚船

生花の心得もある疊職 春日
病人に云はれて疊軽う踏み 一水
孝行を訪えば疊も敷かず住み 宇柳
スズメスズメ疊かきよに歩くもの 牛耕
老婆のやたら氣にやむ古疊 千容
家柄が疊の位置を変えさせず 万古
誕生日疊の巾を子が歩き 久米雄
働いて来て寝るだけの古疊 ただみ
青疊待つてた縁に祖母が逝き 水甫
疊替えされて遊び場せまくなり 禿山
尼様と木魚一疊敷いておる 麦太楼
破れても高藤縁のお家柄 同
社長室の外は疊に椅子を置き 路郎

川 大聖寺支部句会 (石川県)

十月十六日 於 竹田芳子居 野村味平報

酔ひざめの朝の陽射しへ壁のしり 光郎
朝露の牧場は広う乳搾る 桃園
朝帰りともでもないよ夜勤だよ 卓風
愛嬌が高く買われる女事務 味平
揉手して儲けるわざも板につき 光郎
着換へして又付け替へ赤い羽根 とよ
どん尻の紙幣を窓口はじくなり 光郎

小兒科 内科 性病科

安岡醫院

安岡三四郎

道頓堀・日本橋南詰
東へ半丁浜側
電話南③三二四六

欠勤の管よ彼女は見合の日 桃園
朝刊夕刊熊の記事でうづまつて 醉羊
商売に上下はないと唇拾い 桃園

川 洪寺病院支部会 (大阪府)

贈所新三報

決心のゆるぎを位牌に励まされ 風鈴
決心をしたと女房をこわがらせ 楓士
七転び八転び決心向きをかへ 夢郷
決心をして出た管が舞ひ戻り 横寿喜
決心がつかぬが故のオールドミス 美雪
ワンマンの主人会社のすりに居り 楓士
マスターと言われて未だパット吸ひ 秀麗
家計簿を主人の見えろとこへ置き 橋村
御主人の戦友ですにだまされる トヨ子
ダイヤルは謡曲主人だけが聞き 同
大将は苦勞人みんなよく働き 源泉
無口なら課長に見える背広服 青嵐
産む丈けで母に任してアブレ型 桜天
美容体操壁が落ちると叱られる 漫多郎
倅せな余生に菊がもうかおり 青嵐
串カツが通せん棒している給料日 大三郎
妻よりも良人がまめに花を活け トヨ子
歯がはれて昔を偲ぶ顔になり 青道心
ほろ酔の肴になつてゐる易者 勢園

大西野介追悼句会 (大阪市)

十月二十四日 於 西光寺

須崎豆秋報

末席から披露されたいける口 梅里
いける口下戸の隣え来て坐り 賀峰
親の子と認めてくれるいける口 葉光
いける口話せる口でなかりけり 貴山

いける口瘦さんは心得る 万葉
いける口さつくばらんの声になり 香林
いける口一時が鳴つたなと思ひ 路郎
想い出がつゞいて酒が冷めて来る 豆秋
友情は友情法は曲げられず 亜鈍
友情に男泣きする手を握り 葉光
友情に溝が出来たも女から 梅里
友情が烈しい語気となつた夜 貞女
極楽へ大手を振つてゆく野介 梅里
極楽でお門違いと断られ 同
極楽がテレビへうつりそうな鐘 万葉
極楽も地獄も否定しつゝ死に 貞女
ねぶか節みんなもねぶか合唱し 亜鈍
手を叩くばかり音痴は飲むばかり 万葉
ナフタリンころり落ちて形見わけ 豆秋
折にふれ形見を出して独り泣き 賀峰
形見分け遠路いとわず来てこゝろ 凡九郎
かたみわけ故人の意志にちぎ背き 貞女
短冊の形見背中へ入れて去ぬ 亜鈍
遅しく伸びよ父の形見の子 生々庵

南海電鉄川柳会 (大阪市)

於 粉浜親和寮

友淵貴山報

あみ棚で何かこわれた急停車 玲人
網棚にお伊勢へ参る荷が並び 同
残業の疲れ網棚意識せず 雄声
植木屋の缺毛虫を払いのけ 南風郎
嫌はれる様に毛虫は産れて来 同
枯れ果てた桜の毛虫まだ残り 貴山
サンダルにちと不似合な顔から 光治
サンダルを脱げば女の歩きよう 貴山
茶を沸かす幹事一足先へつき 摩天郎

幹事さんもつとお風呂をたいてんか 雄声
議事進行幹事の思ふまゝとなり 圭水
天気図を気にして幹事床につく のぼる
又一人足らず幹事は慌てたり 圭水
無事帰着幹事に酒の酔いが出る 玲人
酔うたのと幹事は折を二つ提げ 路郎
観光バス時間気にせぬ揺れ心地 のぼる
観光バスマイク右向け左向け 南風郎
忙しい都会に邪魔な観光バス のぼる
観光バス観光ホテル素通りし 貴山
千円のお釣に困る小商い 南風郎
子の小遣でもと妻の小商い 雄声
子に望みかけた女の小商い 圭水
小商い一円まけるともいはず 貴山
小商い西陽を受けて売れ残り 同
小商い結構家も建てて居り 圭水
小商いながら一家にある希望 武助
小商いの顔が寄つてる仕舞風呂 摩天郎
悪筆にこれが博士と疑われ 同
悪筆で書いても通る公文書 武助
頭とは別よと悪筆悪びれず 雄声
悪筆は学歴さえも疑われ 圭水
悪筆をおしいただいたお女将なり 路郎

日の丸句会 (鳥取市)

九月二十二日 於 食堂

河村日滿報

急用に今一と息の暮を投げる 湖山
急用へおかまいもなきバスエンコ たかし
急用に秘書居所に目をつむり 湖山
急用と伝言だけの祭り客 秀和
急用へまだ話中話中 日滿
急用は逢引きだつた映画館 遊星
よい月だ飲もうと早速まよつた 三歩

東京をばと

灘一とすじ
アベノ橋地下映画食堂街

梅里の店 大萬

★大万川柳(第卅三回)を募る
兼題「税金」路郎先生選
締切・十二月十五日(郵便五枚以内)
発表・十二月廿一日(店內に掲示)
御投句は大万宛・どなたでも

子は団子俺はお酒といふ月見 柳窓
赤字決算もう残業も嫌になり 芳道
残業の儲けとぶほど労はられ 日滿

みをつくし川柳会 (大阪市)

九月十二日 於 天王寺中学校

戸田古方報

反感を買つて大物落選し 雄声
反感をかう程の身がねたましい ひろむ
反感の紅蓮とまでは燃えつかず 古方
反感を秘めて糸切歯の白く 凡九郎
反感を結局損と知る四十のぼる あほらしさくつとこへお出世つる
ズバリ言ひ切る強さもつて阿呆 凡九郎
阿呆々々と言はれながらに子お二人 光二
プロフィールだけで記者席記事にする 古方

川柳友の会 (大阪市)

八月二十日

於 帝国化工大阪工場

佐野牛歩報

事務的に女事務員をつけなし 寛峯
女事務男の裏も知り尽し 雅菜太

女事務ジロツキへのびる腕もあり 十九一
 女事務まだ純情の固い椅子 京一樓
 盆踊り見くたびれて戻つて来 葉乙女
 盆踊り三日三晩は阿呆で居 辰始
 盆踊りあの娘今年はもうおらず 島浦
 盆踊りやぐらは粋な豆しほり 英治
 盆踊りおばあさんまだ負けてあす 一平
 五分五分であつて内氣の方が敗け 翠風
 五分五分の基石に光る汗のあと 豚平
 五分五分にさばきをつり。街の顔 乱醉
 五分五分の論議へ位負けをする 牛歩

米子川柳金曜会(米子市)

九月十一日 於 漁業組合事務所
 小西雄々報

五十年さらりと扱つて一の桁 青史
 療養のつれづれ、虫の名を覚え 香史
 靴履き富士の煙りを顔に受け みつる
 何もかも見抜いた言ふ易者の腫 水鏡
 蒲納のまゝ湯煙りに酔うている 錦鬼
 四つ玉に初老の指は乱れがち 雄々
 そろばんの合わぬを合せ申告書 至極
 決算へ御機嫌のよい煙草の輪 香月

そろばんのかたい男で高利貸 美笑

石根川柳会(愛媛県)

十月九日 於 石根小学校
 高木文化報

一服を吸うて朝寝は又もぐり 巧
 公約はなんのかんのと忘れがち 南天
 麦飯にあかず祭の寿司にあき ふき子
 雨もりへ炊事道具が降り出され 敏夫
 ことづけが三日も後で届けられ 守
 七回忌お寺が通知して呉れる 同

明和病院川柳会(西宮市)

八月十六日 山本九里三報

帰り道だからと足袋も脱いで去に 奇草
 泣き出した角力双方勝ちにする 青柳子
 腕角力の足が火鉢を押し始め 文化
 満真車車掌の肩が雨にぬれ 同
 結いたての合せ鏡もほゝえまし 臥牛
 ライオンが風袋で子供がつかりし 金太郎
 キヤバレーの桜祭に終電車 里奴
 抽斗を踏台にする智恵もつき 譲治
 盆踊り遠くに聞いて蚊帳をつり 桔梗

不朽洞

会から

▼築山快夢起
 氏(ホノル、市)からホノル、は本年夏から秋にかけて

開催されたこと▼岡村牛耕氏(岡山県)は路郎師選の山陽川柳に第一席に入賞され、小学生の頃上出来のお習字へ朱筆で大きな丸をぐるぐる巻きに入れて貰つたときと同じ嬉しさのこと、御喜び申上げ

国弘 半休門氏を訪問された由、選評を担当された▼私は十月廿七日、白浜温泉に遊び「浜ゆうと云うて芸者と間違はれ」と作句した▼上伊勢路に向われた▼浜田久米 佐々木告天子氏は一身上の都合で十一月限退会された。(摩)

て氣候乾燥、各地断水騒ぎが繰出したが、しかし同氏宅附近は山の縁も変らず故国日本と同様とのたよりがあつた▼前田伍健氏(松山市)は愛媛タイムス(旬刊紙)へ既に八十回に亘り「たぬき日記」を連載されている▼石曾根民郎氏(松本市)は番傘九月号に頼原退蔵博士の「川柳雑俳用語考」を説む書評を執筆された▼麻生路郎師は山陽新聞社会事業団主催歳末厚生義金造成書画工芸展に色紙三点揮毫して贈られた▼大森風来子氏(岡山県)のたよりによると十月十五日来岡の塚越迷亭氏と面会種々懇談された由、なお、十一月二日服部十九平、直原七面山両氏と共に愛生園を訪問、慰問句会を

日を送つていられるが其多忙の中を十月十六日の夜行で上京藤本満年氏夫妻を迎えられ孤浪氏とも面談二十日帰阪された▼村松夢裡氏(京都市)は京大附属病院へ入院青柳博士の手術をうけ経過良好であつたが衰弱が甚しいとのこと一日も早く全癒を祈る▼水谷鮎美氏(尼崎市)は十月二十九日西宮市警察局の招聘により同市警察局講堂に於て警察署員に「川柳の道」と題して川柳の講話をされ聴集百五十名に多大の感銘を与えられた▼西尾栗氏(大阪府)母堂シユウ刀自は十月二十九日令姪の結婚式に臨み、式後七十六才の高齡に不

拘元氣一杯福岡より空路帰阪壯者を凌ぐ元氣で飛行の快味を満喫されたこと▼松江梅里氏(大阪市)は十一月十五日毎日新聞大阪本社講堂に於ける第五回大阪市民川柳大会席題「子」に第一席を獲得された▼山本葉光氏(大阪市)は十月十六日観光バスで京都宇治田原へ茸狩一行に参加せられ途上颯風十三号水害地跡も車窓より状況に接したとのこと▼麻生路郎主幹は十一月十九日午後十一時二十分からB.K.放送のラジオ絵葉書の時間に「一枚のはな紙」を寄稿された、なお十二月八日第二火曜朝八時十五分趣味のしおりの時間B.K.川柳課題「借金」の選評を放送される▼延永忠美氏(岡山市)は十一月月上旬社用で来帰され七日夜の本社句会に出席された▼佐野ト占氏(八代市)のたよりに依ると過般別府から下関への旅行の途次、

麻生路郎著

水武書房版



々噴評好

川柳を研究したい人々に好適の書

本書は著者が多年ウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書として唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して収むるところ三十七講、平明で、親切で初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳している人たちにとつても亦好参考書である。敢えて一説を薦む。

B 6版 (二二二頁) 改正定価一三〇円 送費 十六円

取次御注文は

大阪市住吉區内瓦代四丁目二五
 無雙口庄大阪七五〇

川柳雜誌社



てに局輯編

★本誌の好読み物として好評々の座談会は本号では「川柳に詠まれた歳末風景」を不朽会員須崎豆の須崎豆秋、正本水客、西森花村の三氏に語つていただき編輯側からは梨里が参加した。多数に歳末を詠んだ句が引用され、歳末からにじみ出る社会の微苦笑と云つたところである★隨筆の中の隨筆、シンラツでユーモラスで、毎号好評を博している東野大八氏の「人間横丁」にも十二月は十二月らしく師走の風が首筋に迫つて来る思いをさせられる★富士野鞍馬氏は本号も「平清盛」の続稿でウンチクを傾けられた★福田山雨楼氏の「川柳の歴史」は何人も真似の出来ない業績であつたが、本号へは「落穂」を發表されその完璧を期された★拙稿の「新川柳鑑賞」は本誌の読者に、特に句に親しんでいただくため極く平易に執筆したのであるが、作家の人達からも非常に参考になるから書き続けて欲しいと云

う注文もあるので五百句になるまで書く積りである。御愛読を願いたい。「一枚のはな紙」BKの依頼で放送用に書いたものが（十一月十九日夜、ラジオ絵はがきの時間に放送）スペースがあつたのでお目についた訳である。この原稿はもつと前後を詳しく書くと面白く読めると思うが、ラジオでは時間に制約されるのであんなものになつたのである★表紙は米田三男之介画伯を傾しているが、幸い「川柳雑誌」の味を十二分に出してもらつていたので毎号大向うから拍手を送られてゐる★三月頃から来い／＼と満年氏夫妻に招かれていたので、私は十月十六日の夜行で上京した。会いたい人もあつたが、会えざりがないし又の機会に譲つて、目黒の満年居で悠々と朝ヒル晩に盃をなめて三泊しうなもてなしをしてもらつた。武者小路の色紙を外づして私の色紙と入れかえられた。勿論私の色紙の方が

光つた。その座敷で寝たり起きたり、茶々夫人のお酌でチビリ／＼と飲んだり、縁に出て思索したりした。こんなによつたりとした時間を持つたことは二十年來の出来事だと云えよう。日曜も祭日もない私にとつてコレは全く私へのボーナスであつた。夫妻の案内で新橋演舞場の「花の生涯」を観せてもらつた。二十日の夜帰宅したら例によつて机の上は山積で、幾多の用件が私を待つていた。しかし、私は今度の東京行を牛のように反芻しながら仕事に突入した。★私の句集「旅人」も目下、校正中で校正を終つたのから印刷してもらつてゐる。十二月初旬にはお手許へお届け出来ると思う。私の編纂が手間どつたので予定より遅れ恐縮してゐる。今暫くお待ち願いたい。（略）

川柳雑誌社主催 師走川柳大會

本社恒例の師走川柳大会を左記プロによつて賑々しく開催いたします。日目を忙しくして、健康と方々も、せめて忘年句会には顔出しをして、健康と作句に親しむ時間の持てることを欣び合おうではありませんか。柳友を誘い合せて御出席下さい。お待ちしております。

★日時 十二月十二日（土）午後五時半
★会場 於光明寺
大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前
（市電下寺町又ハ日本橋三丁目下車）
司会者 武部香林

挨拶 中島生々庵

兼題 「へ」ボ」三」 麻生路郎選
「修」繕」三」 市場没食子選
「嘘」三」 土井文蝶選

席題 三題 （題及び選者は当日発表）
柳話 麻生路郎

支部對抗句戦 各支部選手
川柳福引 水谷竹莊案

呈賞 ★各題天・地・人・五客★路郎選天位に
不朽洞賞★對抗句戦優勝者、準優勝者に
川柳雑誌社賞を呈す

会費 六十円 （投句のみの方は十二月十日着便）
（三十四切手同封本社宛）
幹事 紫香・潮花・愛論・梅里・胡蝶・水客
青丹子・一瓢・摩太郎・翠光・春葉・
しげお・貴山・牛歩・博也・竹莊・
妄夢・香林

避妊には... ゼリー剤を!



い実害なし
か無痛
確部を
間も深
時且で
効用器
速連用
★器に
★送り

サンシー

1箱 2太郎 3サンシー

川柳不朽洞會

中島生々庵	川村花菱	東野大八	沢田四郎	高鷲重純	橋本緑雨	麻生葭乃	蛭子省二	柴谷幸二	前田伍健	山路閑古	安川久留美	山本雨迷	田村孝之介	龜井最修	沖野岩三郎	鳥山一步	洞友	岩崎愛二	田中辰二	藤村雅光	高安六郎	中村祐吉	白川朗吉	中田守雄	藤村晴作	長野晴濱	長谷川一徹	池沢楽居	寶助	指導	麻生路郎	奥村丹路	戸倉普天	上田翠光	木村孤浪	戸田古方	水谷鮎美	西尾栗葉	市場没食子	福田山雨樓	寺井鏡々	前山北海	古川麗	内藤草一郎	三輪晚翠	村松夢裡	大坂形水	藤岡至芸	井上湧三	宮田不二	西垣錦風	川村好郎	築山快夢	永田里十九	高田抱逸	小田沙兆	市岡曉舟	三鴨美笑	白砂旋風	正會員	吉田水車	大西入歩	須崎豆秋	石曾根民郎							
正本水客	黒川紫香	九尾潮花	北川春巢	石井白面人	布施筑川	尾崎方正	桜川不水	浜田久米雄	好崎申仙	菊沢小松園	逸見灯竿	清水白柳子	鈴木九坡	夷木一笑	小川恒明	浪玲之介	德永雅美	武部香林	大森風来子	岡島嶺泉	木下幽王	福田妄夢	新川博也	尼川緑之助	水谷竹莊	小橋隆如	弘津柳慶	吉田圭井堂	杉谷湖山	増田耕民	国弘半休門	佐野占	小沢史葉	小西無鬼	大鶴喜由	吉田秋水	山口文蝶	野本文星	土井月峯	小林晴峯	龜山白星	山根瓜平	種瓜抽	渡辺孫	福島正則	富岡淡舟	飯降白香	西辻竹青	長野井蛙	林野魁光	阿万萬的	間島青丹子	上田春柳	友淵貴山	森下愛論	太田良子	岸南柳	松井可笑	松江梅里	丸山弓削平	直原七面山	黒田笑泉	石岡正司	西森花村	河村日滿	田代尋四	家沢花	黄瀬美秋	藤本美秋	西口如川	田夕鐘
益永貞女	馬場夢生	永田六竜子	村上ゆづる	森本法泉子	井野格一	白井呑風	日置文郷	中島兎庵	佐野牛歩	尾野おさむ	兒山紫郎	飯島二桂	岩島雄歩	後藤梅志	小池しげお	竹内圭三	山崎帆加夫	松村萬古	藤井春日	平尾太希志	海野比呂志	木口賀峰	岡本薫翠	津田麦太樓	小西雄々	大倉四案	山田季贊	山田鳥莊	水本無尽	水田千石	中村たのみ	山本葉光	東喜久堂	鈴木天貧	木村千容	田垣方大	那谷光郎	野村味平	木村水堂	膳所新三	花岡英子	入木摩天郎	福田丁路	水谷善水	稻原一善	田村藤波	岡田夜潮	中谷仙坊	坂井三葉	政田大介	中山中納言	白井三林坊	安倍寛子	青柳扇子	岡村牛耕	稲葉鳩花	下山清潮	本田惠二	真鍋一朗	松川柱的											

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

- 妻 (廿句) 福田山雨楼選
 - 旅 (廿句) 長野 井蛙選
 - 女教師 (廿句) 戸田 古方選
 - 約束 (廿句) 杉谷 湖山選
- (十二月二十日締切)

每號募集

- 近作柳樽(雜詠廿句) 麻生路郎選
- 川柳塔(雜詠) 麻生路郎選
- 文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

- ▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
- ▲『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る
- ▲『課題吟』は個人でも投句が出来る。
- ▲『川柳塔』への投句は不朽洞會員に限る。

川柳雜誌 第八卷

B列5号 毎月一回一日発行
 定価 四〇円 (送料四円)
 半ヶ年 二六四円
 一ヶ年 五二八円

川柳雜誌社

昭和廿八年十一月廿五日印刷
 昭和廿八年十二月一日発行
 大阪市住吉區西代西五丁目二五番地
 編輯兼發行 麻生幸二郎
 大阪市住吉區西代西五丁目二五番地
 發行所 川柳雜誌社

THE SENRYU ZASSHI

NO. 319

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

たのしいお買物の夢のせた

近鉄の商品券

を御贈答いたしましょう

100円より各種
両店とも1階賣場




もつと速く もつと便利に...

とのお期待に應えて

名古屋ー大阪特急 2時間55分

名古屋発 八時 三時 四時 五時 六時

大阪発 七時 二時 三時 四時 五時 六時

普通急行はこのほか80分ごと運轉

近畿日本鉄道

OSK

毛織物 既製服 製造卸商

株式会社 **大坂商店**

大阪市東区糸屋町一丁目二

電話東 一七四五番

たっぶり

愛羅たっぶり B1 たっぶり

疲労と脚氣に




女ケダ

錠・注・無痛注